

# 第31回 「寺沢薫氏の邪馬台国論を論じる」

「卑弥呼とヤマト王権」に記載されたものを中心に！

日時：2023年7月8日(土) オンライン開催

丸地三郎

## 寺沢薫氏の邪馬台国論

- 「卑弥呼とヤマト王権」のプロローグより
  - 邪馬台国とは奈良盆地の東南部を占める狭義の「やまと」と領域、つまり、私の言う「ヤマト国」を指し、女王卑弥呼は纏向遺跡にいたという考えを明らかにした。（著書「王権誕生」で初めて言及）
    - 卑弥呼は纏向に居た。邪馬台国は奈良盆地の東南部。
  - 纏向はヤマト王権最初の大王都であった。
  - 「日本」と云う国家は、確かに七世紀末に飛鳥浄御原宮で産声を上げた可能性が高い。しかし、それ以前にはみずからを「倭国」と呼ぶ国家が、歴然と存在し、対外交渉にあたったのである。
    - 倭国と云う国家が有り、纏向に居た卑弥呼が外交交渉を行った。
    - これが「日本国家」に繋がった。
    - 国家の産声を上げたのは、七世紀の飛鳥浄御原宮から。
- 
- 考古学者：寺沢薫：桜井市纏向学研究センター所長が、明確な邪馬台国畿内派であることを「卑弥呼とヤマト王権」で示した。
    - 外の畿内派とは、違うとのこと。
    - 「邪馬台国と卑弥呼には近づくな！」と云う周辺の先生や先輩研究者たちの助言にも拘らず、敢えて、記述。
- 
- これから、寺沢薫氏の邪馬台国論を理解し、論評する。

## 寺沢薫著「卑弥呼とヤマト王権」への個人的期待

- 私(丸地)は、下記のように期待して、この書籍を読んだ。
  - 桜井市纏向学研究センター長の寺沢薫さんは、考古学者として優れた方。
  - 畿内などの発掘調査に携わり、纏向遺跡についても論じている。
    - 著書に『日本の歴史02 王権誕生』講談社、2000年刊行があり、
      - 考古学によって、弥生時代からヤマト王権誕生までの日本の歴史を説いている。
      - その外の著書も多く、その中には、図版が多く示されている。
  - 考古学の成果を、
    - 地図上に置いて、地域の広がりを一望できる図であり、
    - 年代順に土器や発掘物を並べ、時代を一望できる図としている。
  - 視覚的にも整理された、明瞭な論理で、古代史を解説/紹介している。
    - 寺沢さんの講演は、多くの人に感銘を与えて来た。
    - 私(丸地)も、複数回の講演を聴いている。
- 古代史ファンの関心の的となっている「卑弥呼と邪馬台国」について、ついに、書き下ろした。
- どんな内容になっているのか、寺沢さんの明快な論理で卑弥呼の宮殿の有った場所が説明されるのか、期待する。

# 寺沢薫氏の文献に対する姿勢

## • 中国の史書に関して

- 魏志倭人伝に対して:たかだか2000文字に満たない漢文をあれこれ詮索して、この国の三世紀史をうんぬんする時代は終わった。
  - 考古学の成果に忠実でないかぎり、邪馬台国問題は前進しない。
    - 中国の史書「魏志倭人伝」を軽視

## • 日本の史書・文献に関して

- 考古学が明らかにした三世紀史の視点から、『魏志』倭人伝の記載との整合性や相違点を逐一論じると、なぜ最初に『記紀』との関係を論じないのかという叱りを受けることがある。
- 講演会では、こうした質問や批判がかならずといってよいほど発せられる。しかし、
- 戦後の古代史研究の成果によれば、もはや『記紀』の内容をそのまま経時的な歴史史料として対象化する研究者はほぼいないだろう。
  - 「記紀」を無視

# 寺沢薫氏の年代観・歴史観を示す年表

- 寺沢薫氏の年代観と歴史観を理解するため、
  - 「王権誕生」に記載された年表を編集して記す。(「卑弥呼とヤマト王権」には年表が無い)
- 個人的な視点で省略し、単純化した年表とした。

表II (拡大したものを次々頁に示す)

表I (拡大したものを次頁に示す)



五胡十六国		西晋		魏		蜀		後漢		中国		後漢		新		前漢		秦		春秋戦国		中国			
東晋				吳																東周		日本			
古墳時代前期				弥生後期				弥生中期				弥生前期				縄文晩期									
三六六		二八〇	西晋、吳を滅ぼす	二六三	魏、蜀を滅ぼす	二六五	西晋起きる	二六六	十一月 倭王、西晋武帝に貢献	二二〇	公孫氏、帯方郡設置	二一〇	倭韓、帯方郡に属す	二〇〇	倭韓、帯方郡に属す	一九〇	夷族前漢陵を焼く	一四〇	夷族前漢陵を焼く	一〇七	倭国王帥升ら後漢王朝に朝貢し、生口百六十人を献じ、(『後漢書』東夷伝)	前七七〇	周、洛陽に遷都	前四〇三	戦国七雄誕生
この頃より、倭国、朝鮮半島情勢に政治介入始める。		この頃、三角縁神獣鏡の製作が本格的に始まり、定型化した前方後円墳が列島各地で造られ始める。		この頃、三輪山祭祀が確立する		この頃、定型化した巨大前方後円墳の築造が始まる。(箸墓古墳の築造)		この頃、三角縁神獣鏡の製作が本格的に始まり、定型化した前方後円墳が列島各地で造られ始める。		この頃、三輪山祭祀が確立する		この頃、定型化した巨大前方後円墳の築造が始まる。(箸墓古墳の築造)		この頃、三角縁神獣鏡の製作が本格的に始まり、定型化した前方後円墳が列島各地で造られ始める。		この頃、三輪山祭祀が確立する		この頃、定型化した巨大前方後円墳の築造が始まる。(箸墓古墳の築造)		この頃、三角縁神獣鏡の製作が本格的に始まり、定型化した前方後円墳が列島各地で造られ始める。		この頃、三輪山祭祀が確立する		この頃、定型化した巨大前方後円墳の築造が始まる。(箸墓古墳の築造)	



五胡十六国	西晋		魏	後漢		中国	
			蜀				日本東アジアの主な出来事
	東晋	吳					
古墳時代前期					弥生後期		
三六六	三一八	二八〇	二六三	二六五	二六六	二四〇	一四〇
		西晋、吳を滅ぼす	魏、蜀を滅ぼす	西晋起きる	十一月 倭王、西晋武帝に貢獻	倭の女王卑弥呼が狗奴国との交戦を告げる。	羌族前漢陵を焼く
						張政らを派遣、詔書と黄幢を難升米に賜わる。	
						卑弥呼死す。径百余歩の家、百余人殉葬	
						男王を立てるが國中服せず、誅殺しあい千余人が殺される。	
						卑弥呼の宗女で十三歳の台与が女王となり國中安定する。	
						台与、魏使張政らを送還し、魏帝に男女生口三十人を献上	
						纏向型前方後円墳が各地で築造されはじめる。	
						台与政権終わり男王立つ。	
						(纏向石塚古墳、纏向ホケノ山古墳)	
						この頃、定型化した巨大前方後円墳の築造が始まる。	
						(箸墓古墳の築造)	
						この頃、三角縁神獸鏡の製作が本格的に始まり、	
						定型化した前方後円墳が列島各地で造られ始める。	
						この頃、三輪山祭祀が確立する	
						この頃より、倭国、朝鮮半島情勢に政治介入始める。	
						卑弥呼を倭国女王に共立し、「倭国乱」終わる。	
						△新生倭国Ⅱヤマト王権の誕生と都市(王宮)の発生	
						(奈良・纏向遺跡の建設と庄内式土器の成立)	
						卑弥呼の公孫氏外交 (中平年銘の鉄刀)	
						曹操死、文帝(曹丕)	
						孫権 即位	
						孫権、公孫淵を燕王に	
						魏 公孫淵を楽浪公に	
						公孫氏、滅亡	
						楽浪・帯方二郡接收	
						六月女王卑弥呼、魏の明帝に朝献を求める。十二月 親魏倭王の称号下賜	
						帯方郡太守弓、建中校尉梯ら、詔書・印綬を奉じ倭国に詣る。	
						倭韓、帯方郡に属す	
						公孫氏、帯方郡設置	
						第二次高地性集落の後半期に、分布が東西に広がる。	
						(大阪・東山遺跡)	
						鏡を割る儀礼増える。	
						(福岡平原遺跡一号墓(最後のイト倭国王墓))	
						この頃、キビで銅鐸のマツリが終焉。	
						(岡山・高塚遺跡銅鐸埋納)	
						「倭国乱れ相攻伐すること歴年」(『後漢書』東夷伝)	
						後漢王朝の衰退によって、イト倭国の権威失墜。	
						キビ、イツモ、タニワに巨大墳丘墓鼎立。	
						(四隅突出形方丘墓：西谷三号墓、西桂見墳墓群など)	
						円丘の二方に突出部のつく前方後円墳の原型、特殊器台の誕生。	
						△首長靈繼承儀礼の誕生	
						(岡山・築墳丘墓)	
						列島の主なできごと (カッコ内は関係する遺跡や遺物)	
						この頃には、「魏志倭人伝記載の国々存在か。	
						(邪馬台国は「ヤマト」狗奴国は濃尾平野か)	
						(近畿式銅鐸と三遠式銅鐸)	

寺沢薫氏  
の  
年表 II

# 寺沢薫氏の邪馬台国論の概要 I (年表から)

- 紀元前2世紀頃:
  - 北部九州でクニから国への統合が始まる。
- 紀元前1世紀頃:
  - 北九州:ナ国を中心に巨大な青銅器生産のテクノポリス形成。(福岡・須玖遺跡群)
  - 近畿でもオウや首長の住処、高殿、オウ族墓が出現。(池上曾根遺跡の巨大高殿、唐古・鍵遺跡、加美遺跡)
  - ナ国やイト国がより大きな部族的国家連合の形成が始る。
- 紀元1世紀
  - 5年 東夷王大海を渡り国珍を奉ず。(漢書王莽伝) (須玖岡本遺跡の王墓)
  - 57年:王のなかの王が出現し、楽浪を通じ漢と交渉をもつ。(三雲南小路遺跡の王墓)
- 紀元2世紀
  - 107年 倭国王帥升ら後漢王朝に朝貢し、生口百六十人を献じる。(『後漢書』東夷伝)
  - この頃イト国を盟主とするイト倭国が成立。(井原鍵溝遺跡の王墓)
- 190年:「倭国乱れ相攻伐すること歴年」(『後漢書』東夷伝)
  - 後漢王朝の衰退によって、イト倭国の権威失墜。
- 210年:卑弥呼を倭国女王に共立し、「倭国乱」終わる。
  - <新生倭国=ヤマト王権の誕生と都市(王宮)の発生> (奈良・纏向遺跡の建設と庄内式土器の成立)
- 239年:6月女王卑弥呼、魏の明帝に朝献を求める。12月 親魏倭王の称号下賜
- 240年: 帯方郡太守弓、建中校尉梯ら、詔書・印綬を奉じ倭国に詣る。
- 247年: 倭の女王卑弥呼が狗奴国との交戦を告げ、張政らを派遣、詔書と黄幢を難升米に賜わる。
  - 卑弥呼死す。径百余歩の冢、百余人殉葬
  - 男王を立てるが国中服さず、誅殺しあい千余人が殺される。
  - 卑弥呼の宗女で十三歳の台与が女王となり国中安定する。
  - 台与、魏使張政らを送還し、魏帝に男女生口三十人を献上
  - 纏向型前方後円墳が各地で築造されはじめる。
  - 台与政権終わり男王立つ。(纏向石塚古墳、纏向ホケノ山古墳)
- 266年12月 倭王、西晋武帝に貢献
  - この頃、定型化した巨大前方後円墳の築造が始まる。(箸墓古墳の築造)

## 寺沢薫氏の邪馬台国論の概要 II (著書より)

「卑弥呼とヤマト王権」184頁より

- 前節で詳しく述べたように、中国史書の記載から導き出される卑弥呼共立という事件の背景と経緯は、それまでの倭国の体制が一新されたことを語っている。
- 七、八〇年つづいた男王体制が行き詰まり、そこで、まったく新しい女王体制を打ち立てることによって政治的混迷から抜け出し、倭国は再生を果たしたのだ。

これを今日の考古学のデータと解釈に照らし合わせて言いかえると、次のようになる。

- **二世紀初め頃に誕生した倭国(イト倭国)**はイト国を盟主とし、
  - その**範囲は北部九州を中心に四国南西部まで**をふくめた地域だった。
- しかし**二世紀末の政治的混迷**のなかで各地の首長たちによる会盟が執りおこなわれ、その結果、
- 三世紀初め、北部九州を遠く離れた**奈良盆地東南部のヤマト国に新たな王都(纏向遺跡)**が建設された。
  - 列島規模の広がりを持ち、従来の体制を大きく転換した倭国(新生 倭国)が誕生した。
  - こうして部族的国家連合は混乱と女王共立というハードルを越えて、
    - ついに「王国」という国家段階に達した、

というのが私の描くストーリーなのである。

- P184

前節で詳しく述べたように、中国史書の記載から導き出される卑弥呼共立という事件の背景と経緯は、それまでの倭国の体制が一新されたことを語っている。七、八〇年つづいた男王体制が行き詰まり、そこで、まったく新しい女王体制を打ち立てることによって政治的混迷から抜け出し、倭国は再生を果たしたのだ。

これを今日の考古学のデータと解釈に照らし合わせて言いかえると、次のようになる。二世紀初め頃に誕生した倭国(イト倭国)はイト国を盟主とし、その範囲は北部九州を中心に四国南西部までをふくめた地域だった。しかし二世紀末の政治的混迷のなかで各地の首長たちによる会盟が執りおこなわれ、その結果、三世紀初め、北部九州を遠く離れた奈良盆地東南部のヤマト国に新たな王都(纏向遺跡)が建設された。列島規模の広がりを持ち、従来の体制を大きく転換した倭国(新生 倭国)が誕生した。こうして部族的国家連合は混乱と女王共立というハードルを越えて、ついに「王国」という国家段階に達した、というのが私の描くストーリーなのである。

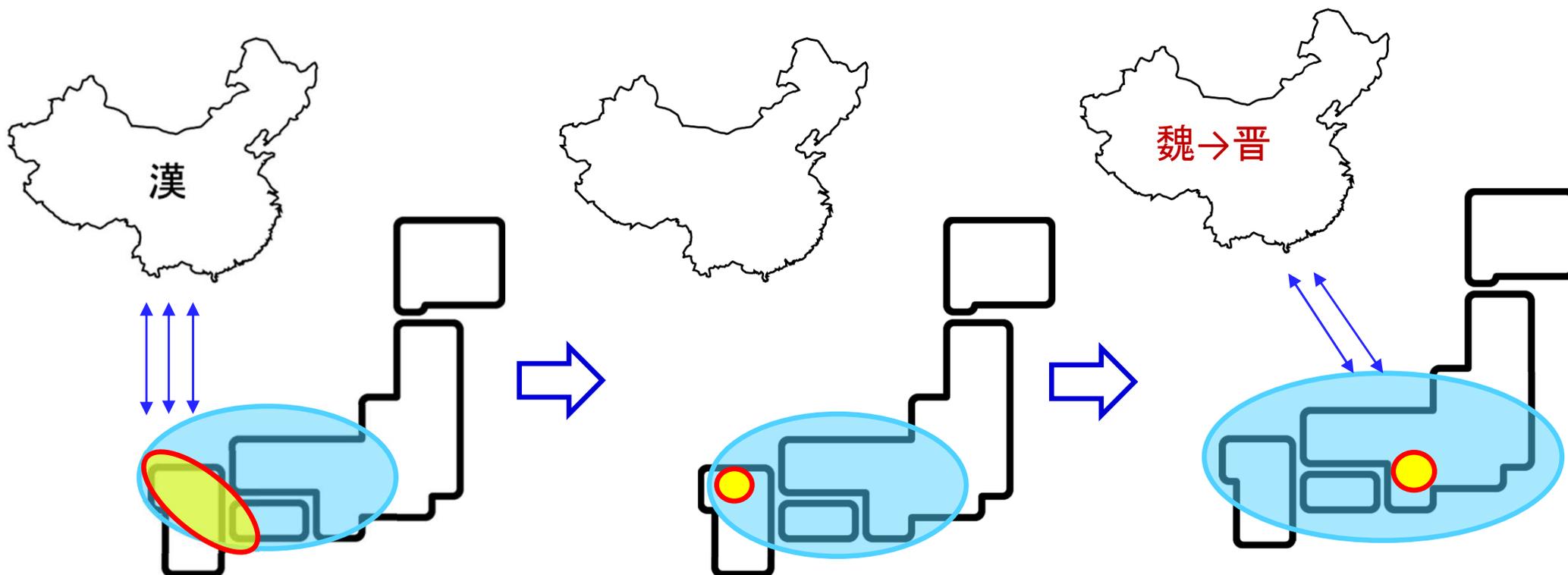
# 寺沢薫氏の邪馬台国論の概要 III (図示)

1. 紀元前2世紀から1世紀までは、ナ国・イト国が存在し、北九州が中心。近畿も王族墓あり。
  2. 180-190年頃/二世紀末の政治的混迷 : 漢の後ろ盾を失ったイト倭国の力が落ち、倭国大乱。
  3. 210年頃、ヤマトに居た卑弥呼を共立。魏の後ろ盾を得て、安定。 ヤマト王権に繋がる。
- 台与の時代に纏向型前方後円墳が始まる。
  - 台与政権が終り、男王が立ち、西晋に朝献。 巨大前方後円墳が始まる。 ヤマト王権へ

前2-1世紀

180-190年

210年以降



# ポイントとなる年代と出来事

- 「王権誕生」「弥生時代の年代と交流」「卑弥呼とヤマト王権」から
  - 紀元57年：倭の奴国王が後漢に朝貢し、光武帝より金印受領。→ 三雲南小路遺跡の王墓に埋葬。
  - 紀元107年：倭国王帥升ら後漢王朝に朝貢。→ 井原鍵溝遺跡の王墓に埋葬  
イト国を盟主とする倭国成立
    - →北九州勢力が強い / この時代は北九州が中心
  - 180-190年:「倭国乱れ相攻伐すること歴年」 /後漢王朝の衰退によって、イト倭国の権威失墜。
    - →イト倭国(北九州勢力)の権威失墜し、日本全土で戦乱が発生した
  - 210年:卑弥呼を倭国女王に共立し、「倭国乱」終わる。 / <新生倭国=ヤマト王権の誕生と都市(王宮)の発生> (奈良・纏向遺跡の建設と庄内 式土器の成立)
    - →北九州勢力が弱体化し、相対的にイズモ・タニハ/キビ(瀬戸内)/近畿の勢力が強体化
    - →キビ/イズモなどが、長年続く戦乱を収束するため、女王を立て、弱体化した北九州勢力と交渉。武力を主体せず、鬼道/呪詛の力を持つ女王は、受け入れられ卑弥呼が共立された。
  - 奈良・纏向遺跡に建設された王宮に居住する卑弥呼を中心とするヤマト王権が誕生
    - 卑弥呼が中国との外交交渉を開始
- 「卑弥呼とヤマト王権」には、外交と戦争に多くの頁が割かれている。  
勢力範囲の変異(北九州→戦乱時代→近畿)には、「外交と戦争」が重要な役割を果たしたと推測。
  - 寺沢氏の勢力範囲/戦傷遺跡/埋納:呪詛/高地性集落など戦争に関わる考え方を確認し、上記の判断に至った理由を検討・確認してみる。

# 寺沢薫氏の考える地域勢力の分布

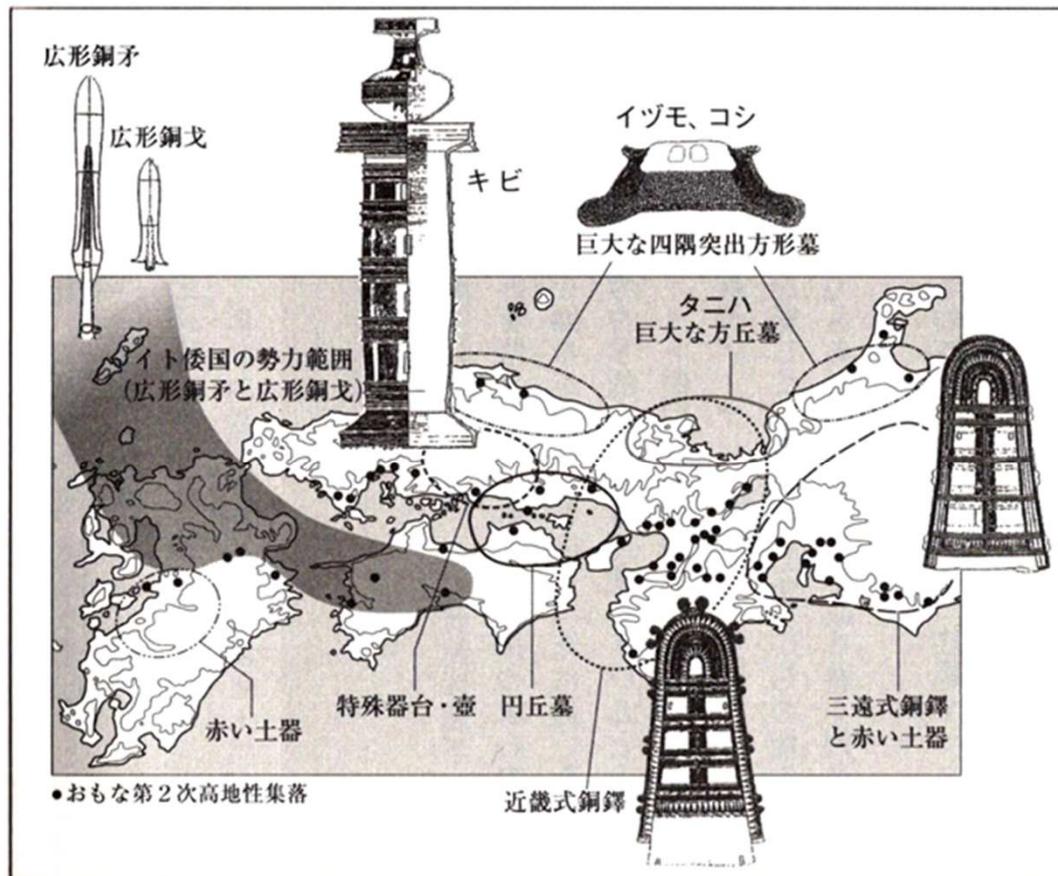


図2 「倭国乱」の頃の地域勢力とそのシンボル（寺沢、2000年より）

「イト倭国」の勢力:

- 勢力範囲は、北九州と四国の一部
- シンボルは、広形銅矛・銅戈

「イヅモ・タニハ/キビ(瀬戸内)/近畿」連合 :

- キビ(吉備)ー特殊器台
  - イヅモ・コシー巨大な四隅突出墓
  - タニハー巨大な方丘墓
  - 近畿ー近畿式銅鐸
  - 東海ー三遠式銅鐸と赤い土器
- 基本的には、この二つの勢力の拮抗が問題

- イト倭国の勢力範囲とそのシンボル広形銅矛・銅戈が注目される。

# 戦傷遺跡

- 右の図が「卑弥呼とヤマト王権」記載の図。
  - 一部、誤りと考えられる箇所があるので示す。
    - スタレ遺跡●：橋口2007年には、中期中頃と記載→○
    - 土井ガ浜遺跡○：とあるが、縄文末期～弥生前期前半のもの→△が正しい
    - 青谷上寺地遺跡●とあるが、単独では無く、百名を超える多数の人骨が出土
- 寺沢氏は、戦争があったことを戦傷遺跡から認識している。しかし、これらの戦傷死人骨から戦争の勝敗は論じていない。
  - 「王権誕生」では：多数の犠牲者を出した筑紫野市の永岡遺跡や惨殺死体のめだつ隈・西小田遺跡は、考古学者から「戦いに敗れたムラ」という不名誉なレッテルまで貼られてしまった。とこの見解を支持。
  - 寺沢氏は、**戦傷死人骨は敗者側の人骨**と考えていると推定。
- 「戦傷死人骨は敗者の人骨」との見方から寺沢氏の考えを読む
  - 弥生前期後半～中期中頃→△
    - 北九州全域に戦傷死人骨○が多く、九州勢力の**敗北が重なる。(九州内部で争乱が続く?)**
    - 出雲・瀬戸内地方も戦傷死人骨○があるが**敗北は軽微**。
  - 弥生中期後半以降
    - 九州全土に戦傷死人骨●が多く、一方、出雲・吉備・大阪なども頃●が多い。
    - 日本全土で戦乱が有り、戦傷死人骨も拮抗した状態
    - この時期が「倭国大乱」にあたる。

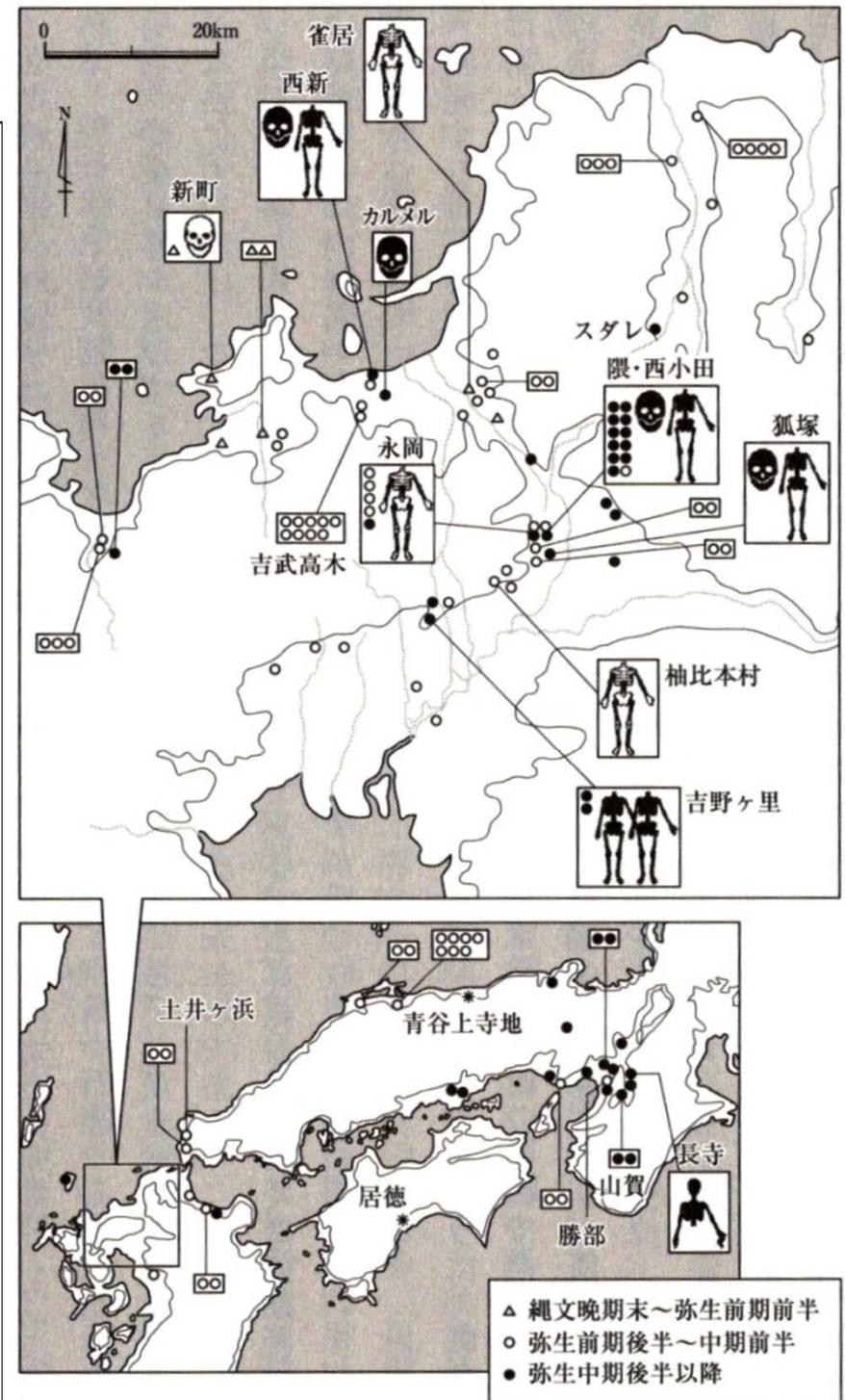
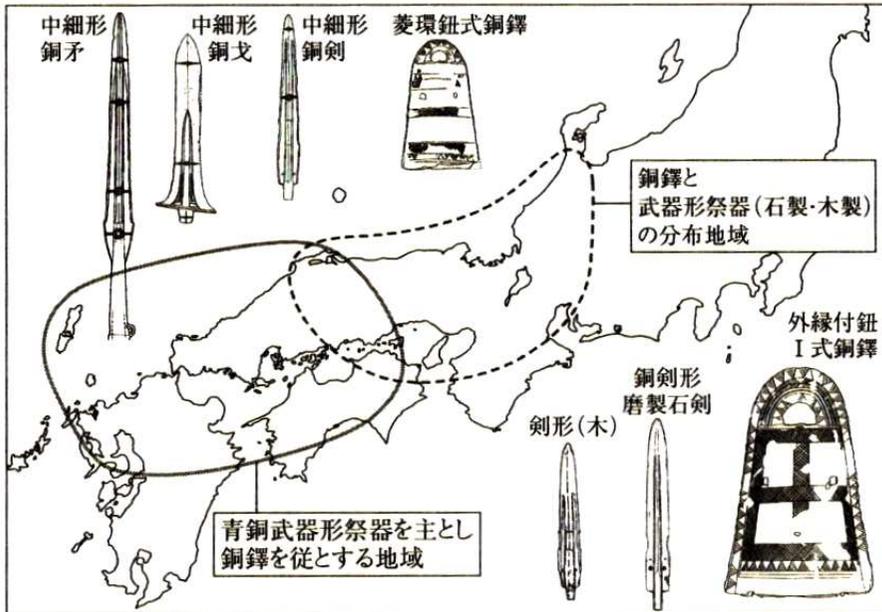
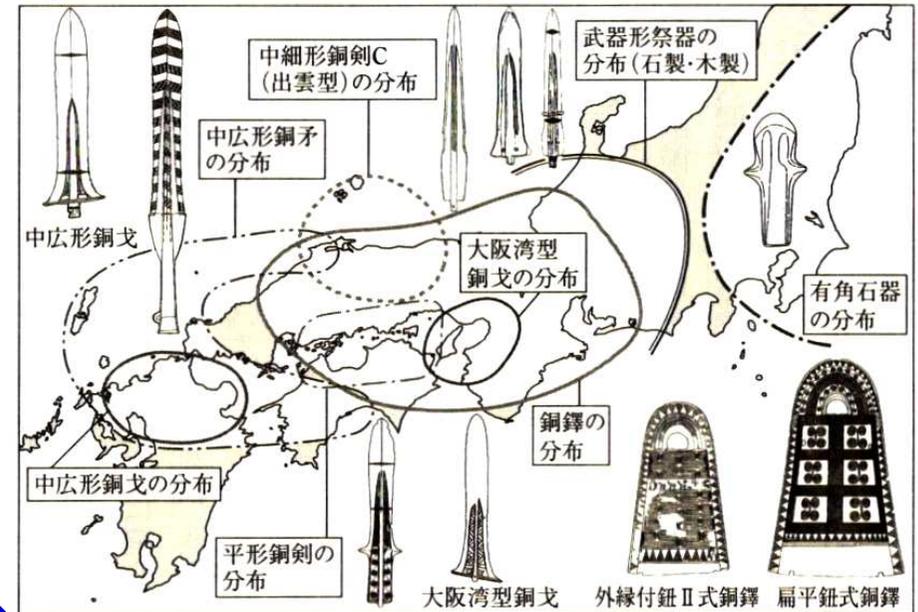


図4 殺傷人骨の分布 (橋口、2007年/橋口、2011年/国立歴史民俗博物館編、1996年などにより作成)

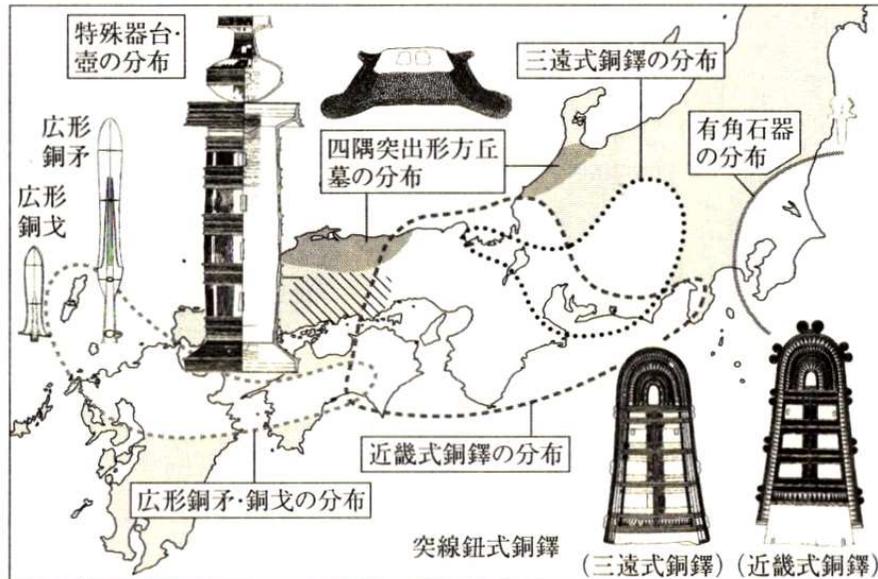
# 青銅のまつり I / II / III 段階



青銅のまつりの第I段階 (前2世紀後半～前1世紀前半)



青銅のまつりの第II段階 (前1世紀後半～1世紀前半)この段階になると、武器形と銅鐸という対比だけでなく、各地域で独自の青銅の祭器がシンボルとして生みだされた



青銅のまつりの第III段階 (1世紀後半～3世紀頃)広形銅矛の分布範囲がイト「倭国」であり、近畿式銅鐸圏がそれに対峙していた

- 第I段階/第II段階では、ナ・イト国の青銅祭器は、中四国/近畿と共通のものが使われている。
  - 但し、中広形銅戈だけはナ・イト国専用
  - 中広形銅矛は共通
- 第III段階では、広形銅矛・銅戈がナ・イト国用で、三遠式銅鐸・近畿式銅鐸が中四国/近畿側用と分離
  - 但し、中国地方は青銅製祭器は空白領域になる。
- 青銅製祭器による二つの勢力範囲が不明瞭。

# 青銅製武器型祭器・銅鐸の埋納

## • 埋納の目的:

- 畿内中枢権力が、近畿縁辺への悪霊、邪気を払うマツリを行った。(春成秀爾氏の考えを紹介し自論へ繋ぐ)
- 近畿にとって辟邪すべきは悪霊、邪気とは、もっと現実的な北部九州の脅威そのものだったのではないか。(その悪霊・邪気を払うために、埋納を行った。)
- 第II段階までの古い銅鐸は、大量に集積することで、むしろ辟邪の力を増幅して共同体を守るために、地下へ深くへと永遠の眠りについた。
- この事件を境に銅鐸はひたすらに大きく精巧に飾り立てられ、共同体そのものを加護し、敵対するものに対して積極的な呪禁(じゅごん)『呪力によって邪を払い、同時に悪霊や敵を威嚇し殲滅するための呪詛をかけること』を行うために青銅の祭器として再生したのである。
  - 一言でまとめると、青銅器の埋納は、「敵を呪い殺すために地下へ埋めた」と解釈する。

## • 青銅器の埋納時期:

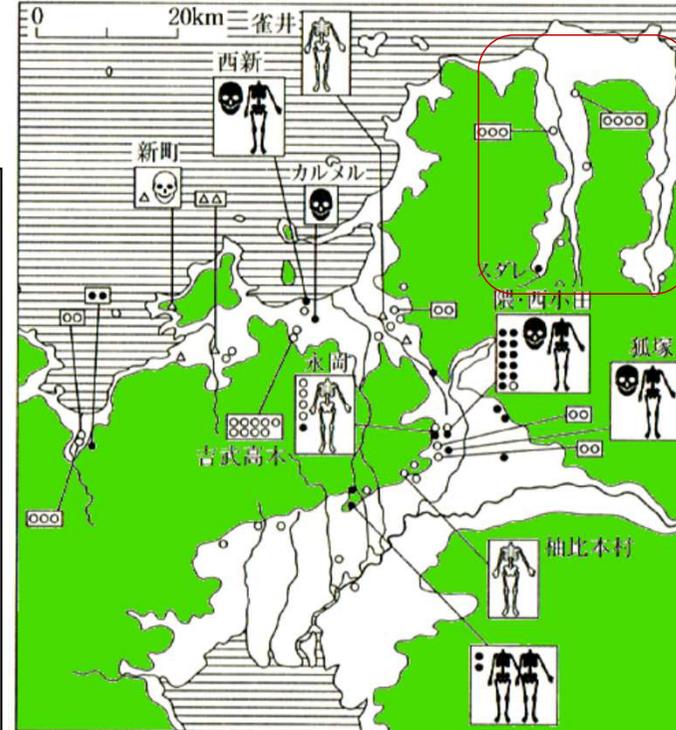
- 青銅器が作られた後に、呪い殺すべき敵が現れた時期に埋納。
- 基本的には、生産された時期に従って、順次、埋納されて行った筈。
  - 紀元前141年頃 青銅のマツリ第一段階
  - 紀元前8年頃 青銅のマツリ第II段階
  - 紀元14年頃 近畿とイズモで青銅器の大量埋納
  - 57~107年の間 青銅のマツリ第III段階

## • まとめると:

- 青銅製武器型祭器・銅鐸の埋納は、「敵方を呪い殺す目的で、地下に埋めた」。
  - 敵方とは、北部九州の勢力(ナ国・イト国連合)。
- 埋納は、年代に応じて、順次行われた。

# 北九州の戦況を検討

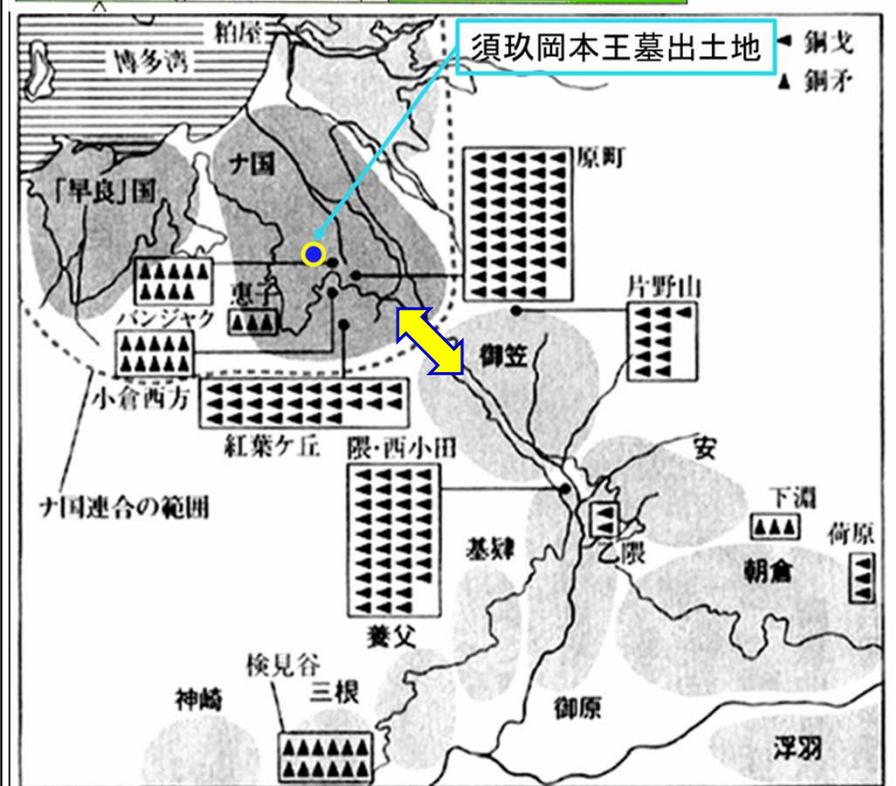
- 「戦傷死人骨は敗者の人骨」で、「埋納は呪禁のため」とする寺沢氏の考え方から、北九州の情勢を読む
- 弥生前期後半～中期前半の戦傷死人骨
  - から見ると遠賀川地域も戦乱で敗北、福岡平野：須玖岡本周辺も敗北。
  - 早良平野でも戦乱が有り、平原地区にまでも戦争が拡大。
  - 太宰府の地溝地帯を越えて隈・西小田/狐塚から神崎(吉野ヶ里)付近にまで戦乱が及んだ。
- 弥生中期後半以降
  - ナ・イト連合は、青銅製の広形の矛・戈を須玖岡本遺跡の周辺に大量に埋納し、呪禁(じゅごん)を行った。
  - 更に、毎回負けている隈・西小田や神崎でも、対抗して埋納を行い、呪禁を行った。
  - 戦傷死人骨●は、南は隈・西小田や神崎に及び、再び早良平野の西新・カルメンでも戦傷死人骨●があり、戦禍が及んだ。
  - 更に唐津まで戦傷死人骨●が出て、戦乱が各地に広がった。戦乱の無かったのは、平原・糸島地域だけとなった。
- 寺沢氏の解釈で、戦果を検討する
  - 北九州全域で、戦乱が広がり、イト倭国は、辛うじて平原・糸島地域だけは、戦乱に巻き込まれなかった。
- 北九州でこれだけ戦乱が起き戦死傷者が沢山出たことを考慮すると、イト倭国は、中四国・近畿に脅威を与えるほどの力を持てたのか疑問。



後期の  
戦争遺跡

遠賀川付  
近の地図  
は不正確  
に見える。

寺沢薫著  
「王権の  
誕生」  
より



ナ国と周辺のケニゲニの呪禁

# 寺沢氏の「高地性集落」の解釈

- 右図は、第二次高地性集落の分布。「弥生時代の年代と交流」より
- 高地性集落は情報通信施設であり、有事の際には地域集団の逃げ城ともなる。
- 戦争や軍事的緊張の存在を裏付ける考古学的資料とされているが、じつは戦争が頻発した時期の北部九州には、典型的な高地性集落はほとんどみられない。
- むしろ弥生時代中期後半から後期初め(前一世紀後半～一世紀中頃)、北部九州の勢力拡大に対して危機感をもったであろう瀬戸内海沿岸部や大阪湾沿岸地域にこそ顕著である(第一次高地性集落)。
- 弥生時代の高地性集落は実戦用の山城というより、有事に備えた危機管理施設なのである。
- 北部九州にナ国・イト国連合が生まれて以降、危機感が恒常化していた弥生時代後期の第二次高地性集落のうちでも、イト倭国の成立によってますます危機意識が高まった後半期の分布状況を示している。
- イト倭国の勢力範囲に接する中部九州や南四国、西部瀬戸内のほか、遠く東海西部へと社会的緊張が拡散した状況が見て取れる。
- しかしこの時期に、列島規模で戦争が繰り返されたという考古学的な証拠はほとんどない。
- つまり「倭国乱(倭国乱る)」とは、倭国が混乱したことをいうのであって、戦国時代の戦い合う状況が勃発した「大乱」などではないのだ。

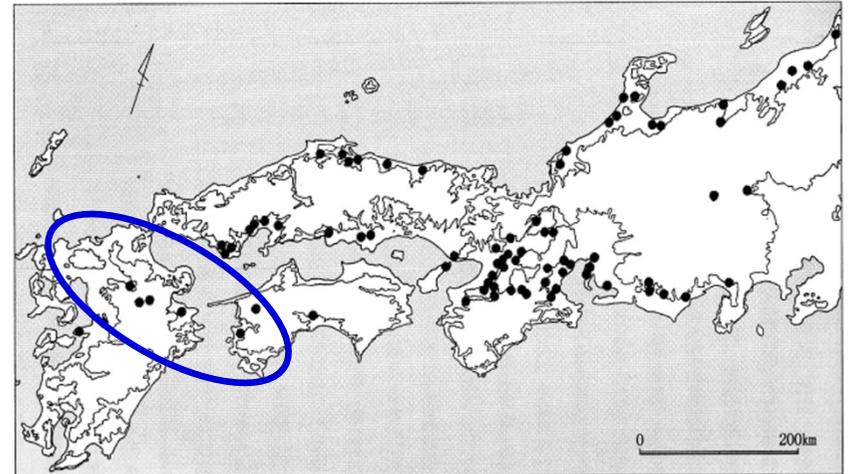
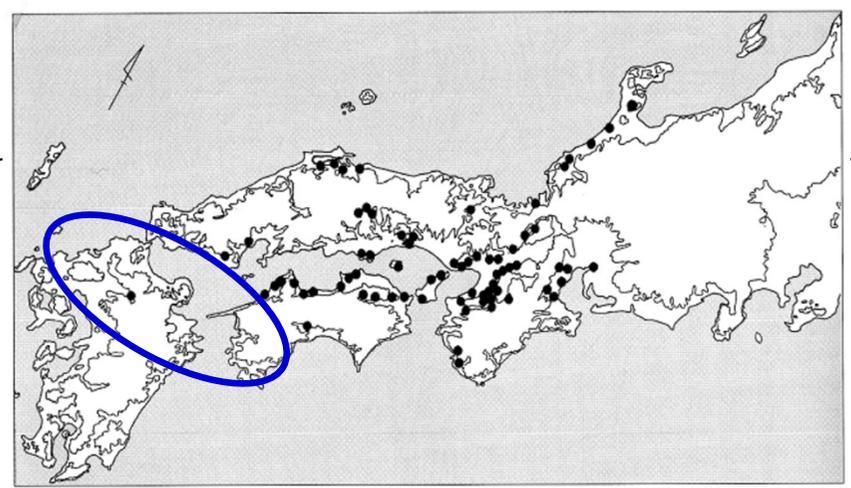
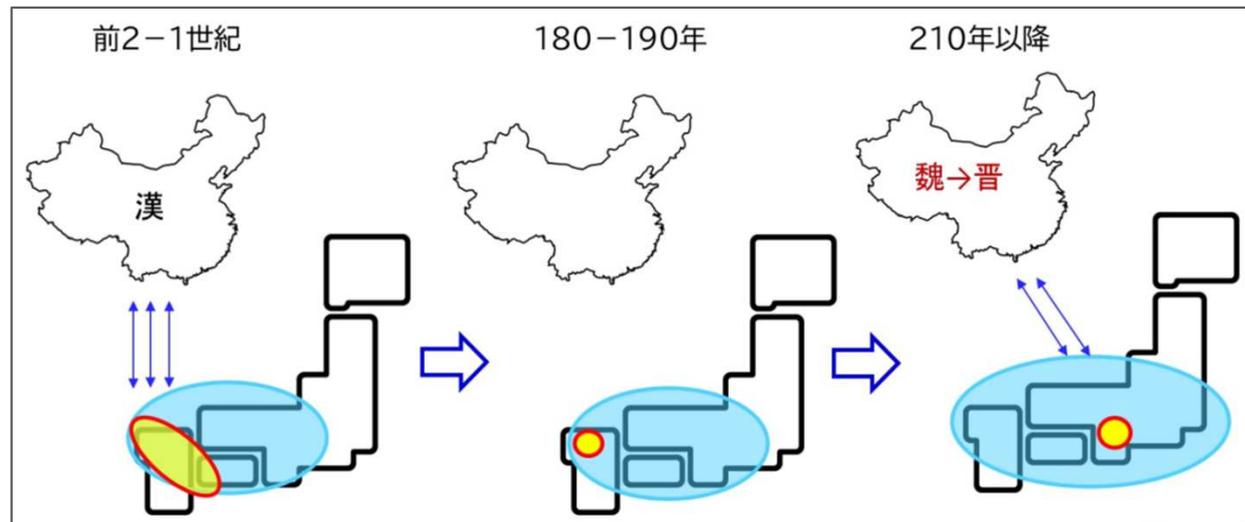


図121 典型的(第1類型)な第2次高地性集落の分布(上:後期前半~中頃、下:後期中頃~後半)

# 戦傷遺跡/埋納/高地性集落から見た邪馬台国のシナリオ

- 最初は、北九州の勢力が圧倒的で、吉備・出雲・瀬戸内・近畿も王族が居て対抗していた。
  - 戦傷死人骨から見ると、北九州全域で戦乱が広がり戦死傷者が多く、出雲・瀬戸内では戦死傷者は軽微。
  - 高地性集落は、戦争に備えるもので、北九州にはその備えは無く、瀬戸内から東は十分に備えた。
    - しかも、実際に使われた形跡はなく、北九州側からの攻撃は、成功しなかった。
  - 吉備・出雲・瀬戸内・近畿では、北九州勢力に対抗して青銅祭器を埋納し、積極的に呪禁(じゅごん)を行った。
    - 九州内でも、お互いに青銅祭器を埋納し、呪禁を行った
- 180-190年頃/二世紀末の政治的混迷 : 漢の後ろ盾を失ったイト倭国の権威失墜し、国同士の均衡が破れて日本全土で、倭国大乱(各勢力が並び立ち・主の居ない状況)となった。
  - しかし、信長/秀吉/家康の戦国時代の様な全国的な戦乱にはならなかった。
- 210年頃、吉備・出雲・瀬戸内・近畿の勢力が中心となって、ヤマトに居た卑弥呼を共立。
  - 戦争の終結の願う、北九州のイト倭国も、武力を象徴しない女王であることから共立に賛成。
  - ヤマトの纏向の地を基盤として女王の王権が成立し、魏の後ろ盾を得て、安定。
  - ヤマト王権に繋がる。



# 寺沢薫氏の邪馬台国のシナリオについて

## 『寺沢氏の認識』

- 地域勢力分布の認識は、
    - 北九州全域+四国の一部 ⇔ 吉備・出雲・瀬戸内・近畿
  - 戦傷死人骨(戦争遺跡)は、
    - 戦争で負けた側を示す遺跡
  - 青銅祭器の埋納は
    - 敵を呪い殺すために、地下へ埋めたもの
  - 高地性集落は
    - 有事に備えた危機管理施設で、殆ど使われなかった。
- 
- 上記の寺沢薫氏の戦争関連の認識に疑念がある。
    - 地域勢力分布
    - 戦傷死人骨
    - 青銅祭器の埋納
    - 高地性集落
 について、検討して見る。

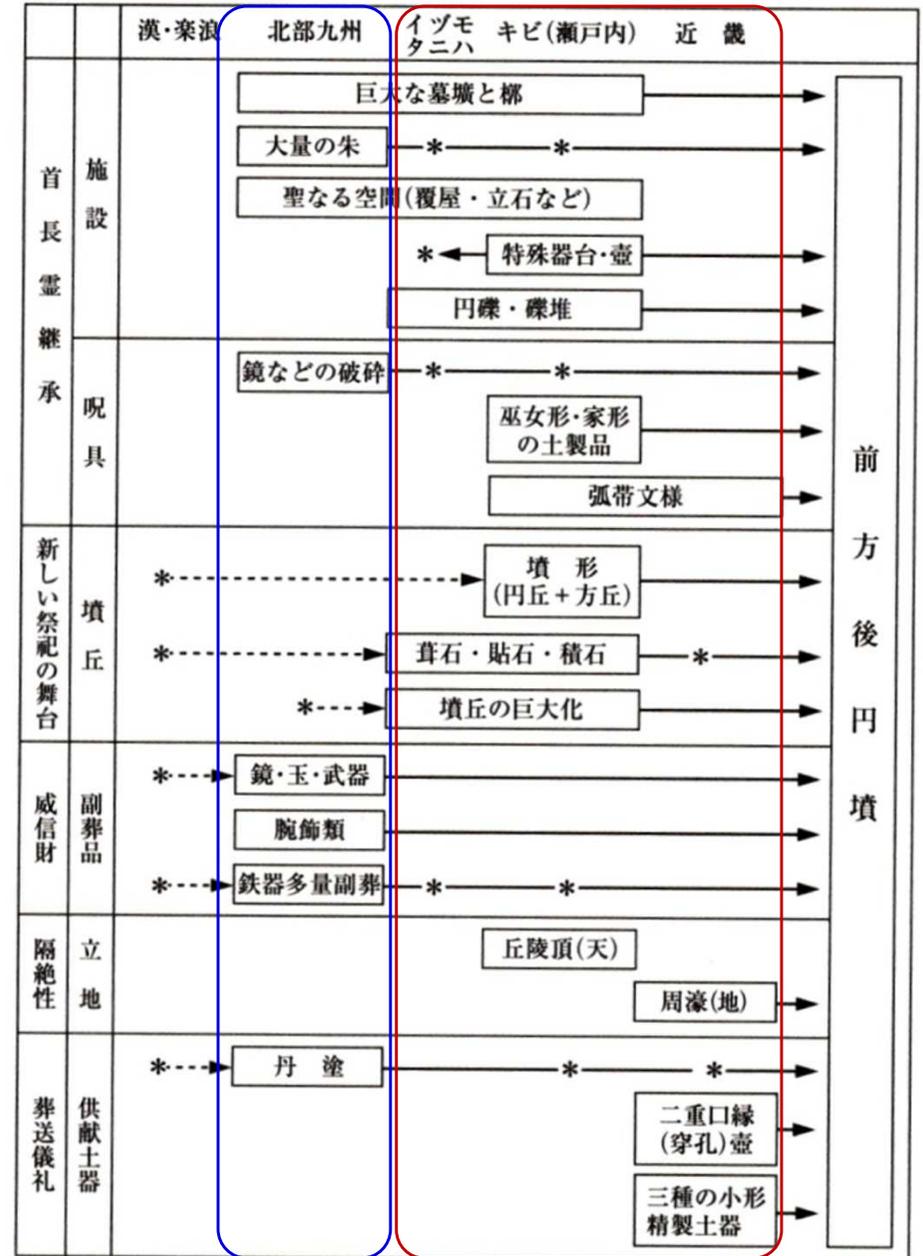


図12 前方後円墳の主要な属性とその系譜 \*は過渡的な受容を示す(寺沢、2000年より。一部改変)

## 表1-5 銅矛・銅劍・銅鐸の移り変わり

参照文献：『古代出雲文化展 神々の国悠久の遺産』 島根県教育委員会・朝日新聞社 1997

	弥生時代前期 (I期)	弥生時代中期 (II期) (III期) (IV期)		弥生時代後期 (V期)	
銅矛	50cm 細形I式(福岡・田端) 	細形II式(佐賀・久里) 	中細形a類(島根・神庭荒神谷) 	中広形b類(島根・神庭荒神谷) 	広形(長崎・クビル) 
銅劍	40cm 細形I式(福岡・田端) 	中細形a類(高知・波介) 	中細形b類(大分・浜) 	平形I式(香川・瓦谷) 	中広形(徳島・源田) 
銅鐸	40cm I式(島根・神庭荒神谷) 	II式(島根・加茂岩倉) 	III式(島根・加茂岩倉) 	IV-1式(島根・飯屋) 	IV-3式(和歌山・桑谷) 

伊倭国  
が埋納

# 青銅製祭器の埋納

- 寺沢薫氏は、青銅器の埋納は、呪禁(じゅごん): 「敵を呪い殺すため」に地下へ埋めたと解釈する。
- 埋納は
  - 青銅のマツリ第一段階
  - 青銅のマツリ第II段階
    - 近畿と伊佐モで青銅器の大量埋納
  - 青銅のマツリ第III段階
 に分かれて、時期を隔てて、行われたとする。
- 埋納時期：
  - 青銅器の型によって製造時期が大体分かるため、製造時期から推定している。
  - 土器一緒に出土すれば、それから埋納時期を確定できるが、土器と一緒に出土したことが無いとのこと。



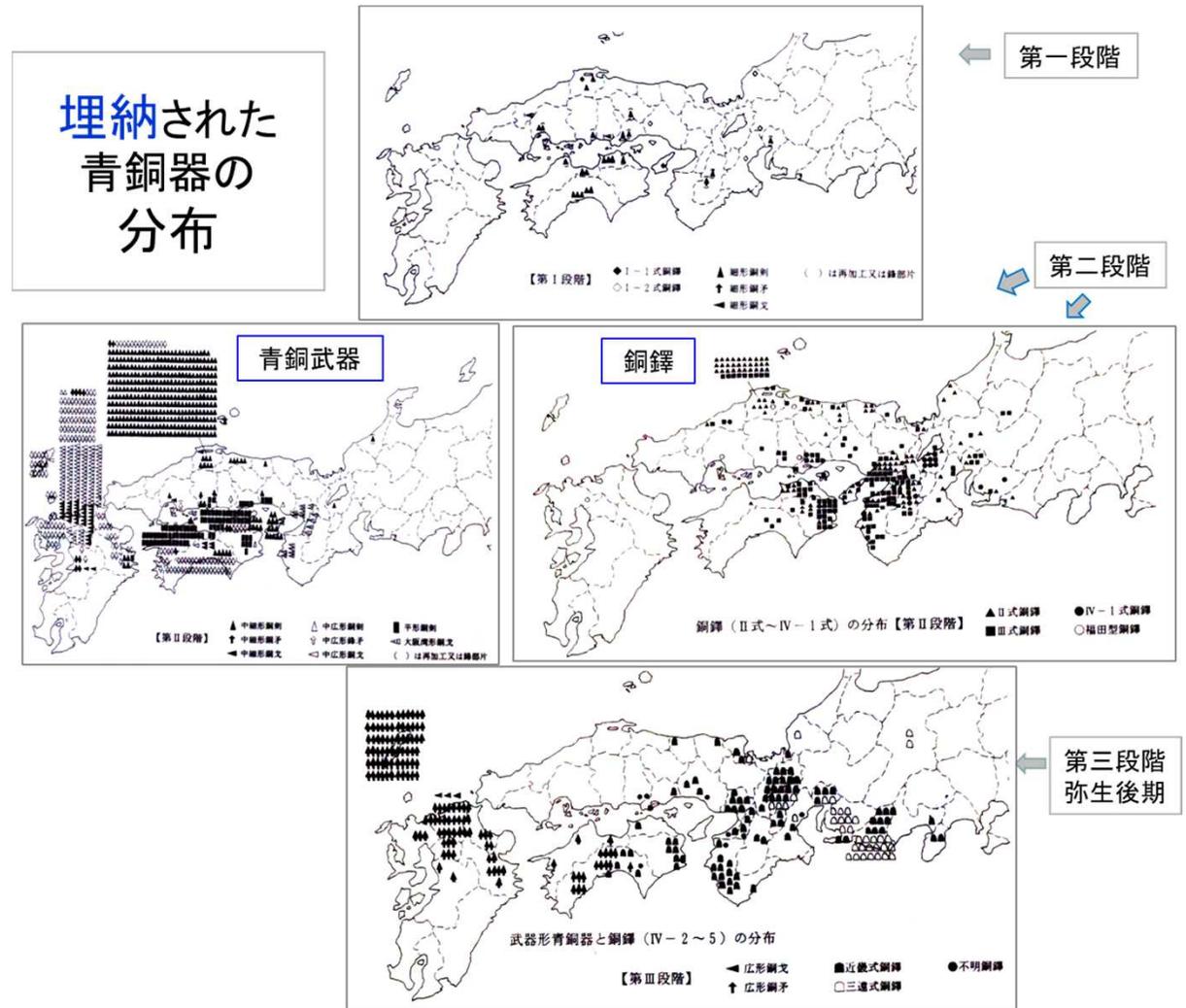
- 「安本美典氏の講演会記録」 204回による

## 銅鐸の埋められた時期を推定する手がかり

近年、銅鐸を埋めた穴の中や、穴を覆う土中に土器が発見された事例が4、5例ある(矢野、櫻井市の大福、羽曳野市の西浦、跡部など)。

土器の年代から、これらはすべて弥生後期か、すぐあとの庄内式の時代といえる。

図の原典は下記の論文  
松本岩雄「弥生青銅器の生産と流通—出雲地域出土青銅器を中心として—」古代文化 第53巻第4号 2001年 より



青銅製の祭器について、もう少し、検討して見たい。生産地のこと。別の出土方法について検討する。

# 生産と副葬

## 生産地

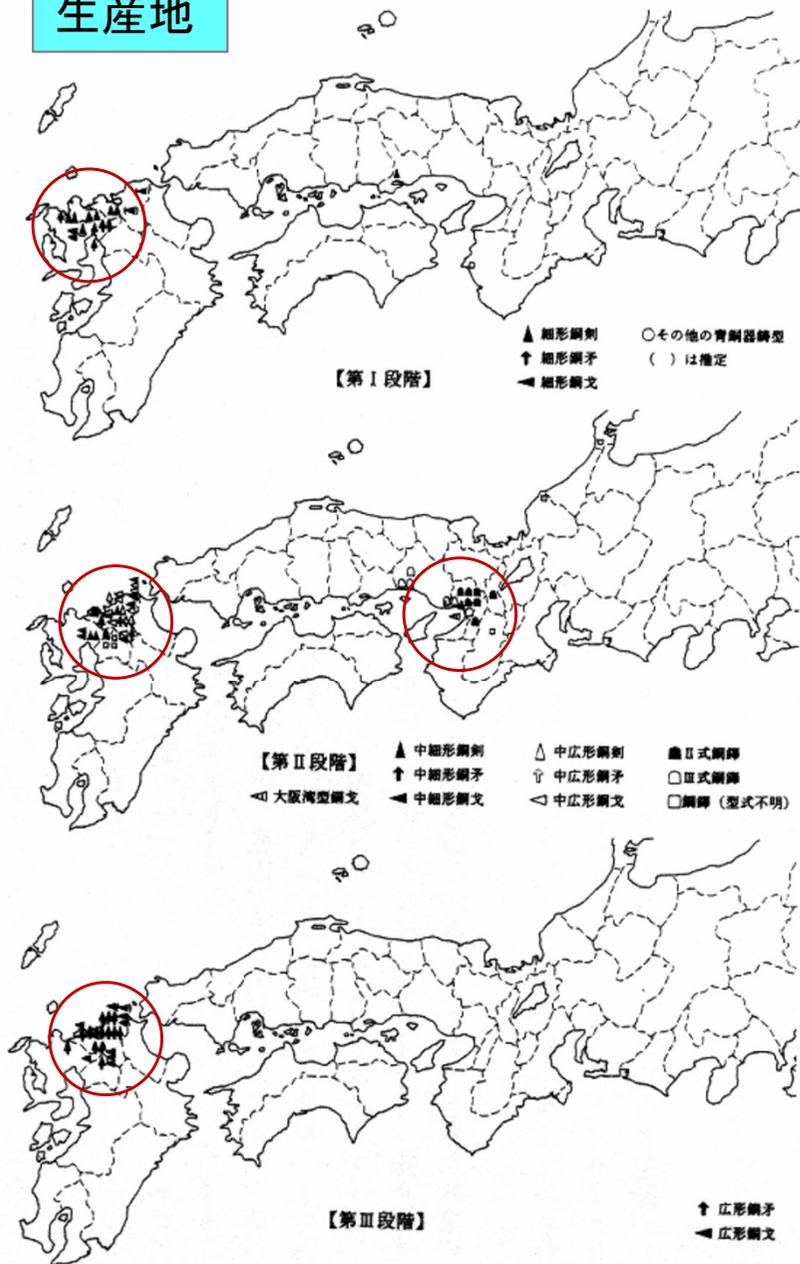


図12 鋳型の分布

(松本岩雄「弥生青銅器の生産と流通—出雲地域出土青銅器を中心として—」『古代文化』第53巻第4号 2001年より)

・左図は鋳型の分布、右図は副葬品として出土分布図

・鋳型は生産地を示す。  
 ・第一段階と第三段階では、生産地は北九州に限定。  
 ・第二段階では、北九州に加え、大阪を中心に滋賀、奈良及び北陸が生産地に加わった。

・北九州に限り、副葬品として墓に納められた。北九州以外は、墓に納めるには貴重過ぎたものと考えられる。

・大阪近辺では、北九州から青銅器の供給を受けていたが、第二段階では、自分達の手で生産を行った。

・それだけ大切な品物を、土中に埋めたのは、特別な事情があったのでは？

## 副葬

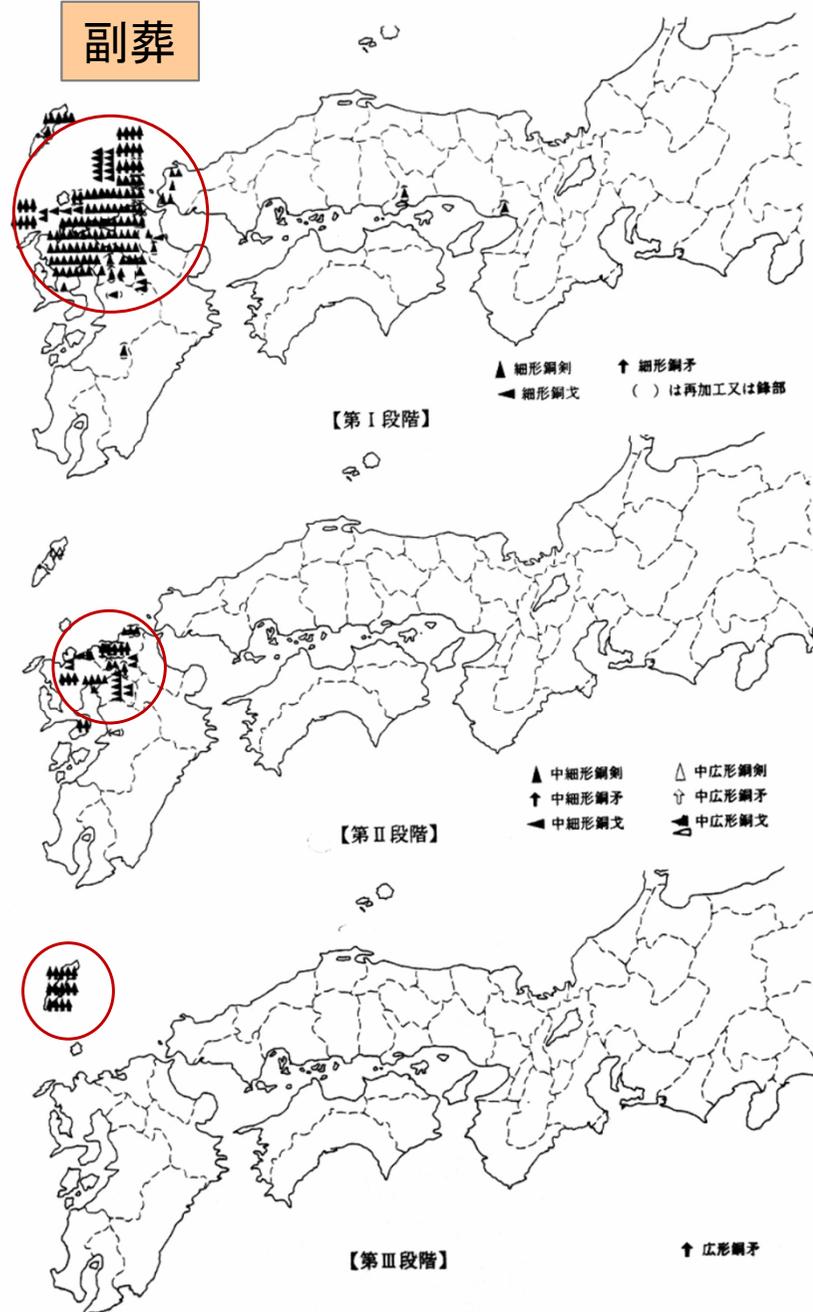
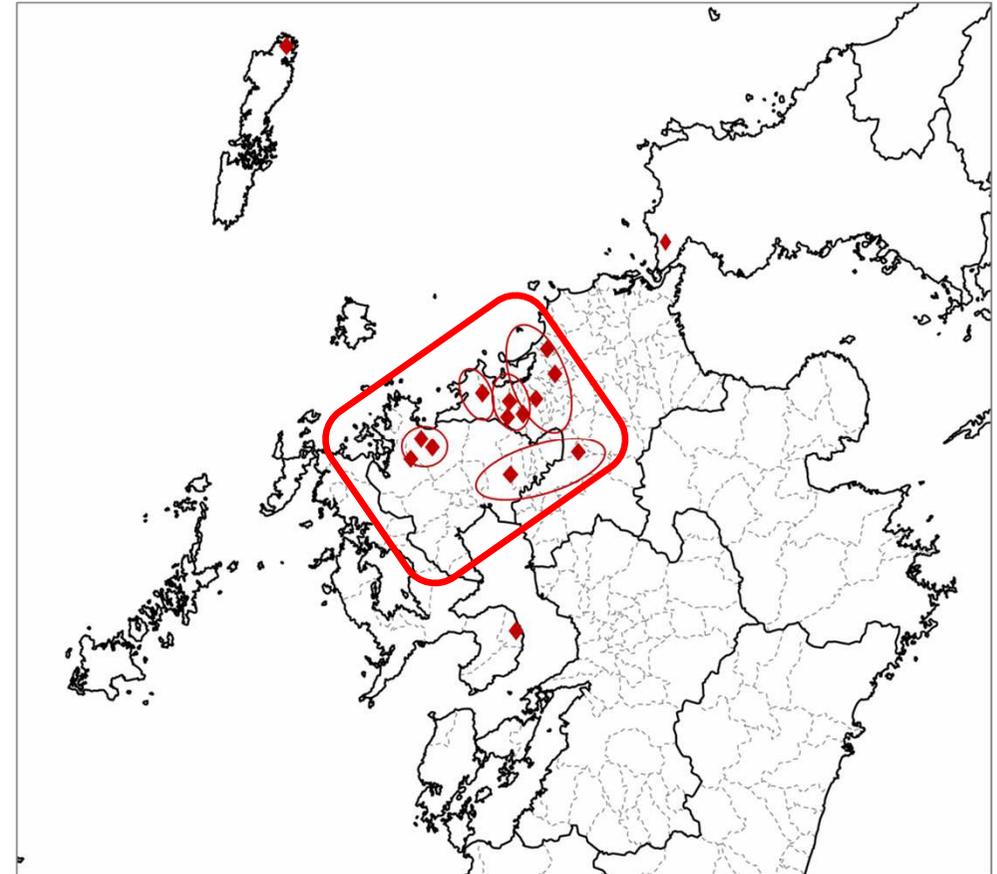


図7 墳墓出土青銅器の分布

(松本岩雄「弥生青銅器の生産と流通—出雲地域出土青銅器を中心として—」『古代文化』第53巻第4号 2001年より)

# 青銅器の副葬と埋納の違い → 地域勢力分布の読み違い

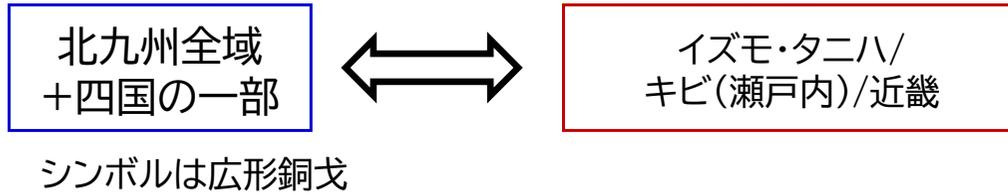
- 同じ地面の下に埋める行為ではあるが、「副葬」と「埋納」には大きな違いが有る。
  - 一方は、死んだ人の大切な物をその墓に供える行為。一方は、辺鄙な人に知られない場所に埋めてしまう行為。
  - 副葬以外は、青銅製祭器は、全て埋納。
- 青銅器の副葬は、ほぼ九州の特定の地域に限定される。地域を特定してみる。
- 副葬した地域：（右図、◆でマークした埋葬地の地域）
  - 地域は、ナ国とイト国の範囲(佐賀・筑後平野を含む)
  - 青銅器の主要な生産地域
  - 副葬した地域は、
    - 玉・鏡・剣(三種の神器)が出土することが多い。
    - 豪華な副葬品(威信財)が多い
    - 剣の素材は初期は青銅。その後は鉄製。
  - 青銅製の中広型・広型武器は副葬されない。
- 埋納が行われた地域は、
  - 青銅製祭器が副葬されない。
  - 鏡・玉・刀/剣が副葬されない。
- 副葬が行われた地域と埋納が行われた地域は、別々の勢力の地域と見るべきと考える。
- 寺沢薫氏は、ナ・イト国連合の勢力範囲を北九州全体と示しているが、右上図の唐津・佐賀・福岡平野の狭い領域に限定されていたと考えるべき。
  - イズモ・タニハ/キビ(瀬戸内)/近畿は、上記◆地域以外の北九州を加えた広い領域となる。



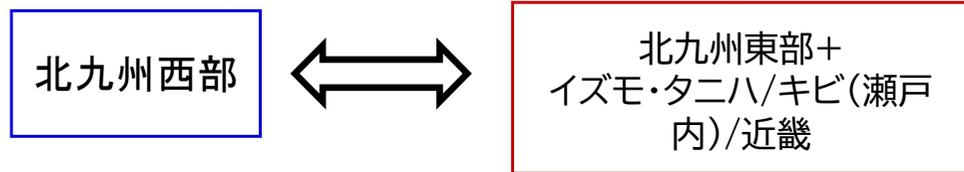
◆青銅器を副葬した地域→天孫族

# 地域認識の違い

## 『寺沢氏の地域勢力分布の認識』



## 『別の地域勢力分布の認識』



### ・ 地域勢力分布の認識は

- ・ 北九州の西部：唐津・糸島/平原・早良・ナ＝福岡平野・早良平野・平原/糸島・唐津平野・筑紫平野・佐賀平野
- ・ 北九州の東部とイズモ・タニハ/キビ(瀬戸内)/近畿

このように変える必要がある。

- ・ 北九州西部は、寺沢氏流に言い直すと、ナ・イト国連合で、工業地帯。
  - ・ 初期の青銅器の生産工場の全てを含む、先進工業地帯。
  - ・ 同様に、鉄器・ガラス器の先進工業地帯。

- ・ 北九州の東部とキビ/イズモ・タニハ/アワ/近畿連合は、農業・漁業の一次産業地域で、後に装飾品：勾玉/管玉の生産地帯。

- ・ 地域認識を改め、埋納の認識/戦傷死人骨(遺跡)の意味を改めて見ると、理解し易い、解釈が生まれる。

		漢・楽浪	北部九州	イズモ・タニハ	キビ(瀬戸内)	近畿	
首長 靈継承	施設		巨大な墓壙と柵 大量の朱 聖なる空間(覆屋・立石など)		* ← 特殊器台・壺 円礫・礫堆		前方 後円 墳
	呪具		鏡などの破片		* ← 巫女形・家形の土製品 弧帯文様		
新しい祭祀の舞台	墳丘			* - - - - -	墳形(円丘+方丘)		前方 後円 墳
				* - - - - -	葺石・貼石・積石	*	
				* - - - - -	墳丘の巨大化		
威信財	副葬品		* - - - - - 鏡・玉・武器 腕飾類				前方 後円 墳
			* - - - - - 鉄器多量副葬	*	*		
隔絶性	立地				丘陵頂(天)		前方 後円 墳
					周濠(地)		
葬送儀礼	供献土器		* - - - - - 丹塗		*	*	前方 後円 墳
					二重口縁(穿孔)壺 三種の小形精製土器		

図12 前方後円墳の主要な属性とその系譜 \*は過渡的な受容を示す(寺沢, 2000年より。一部改変)

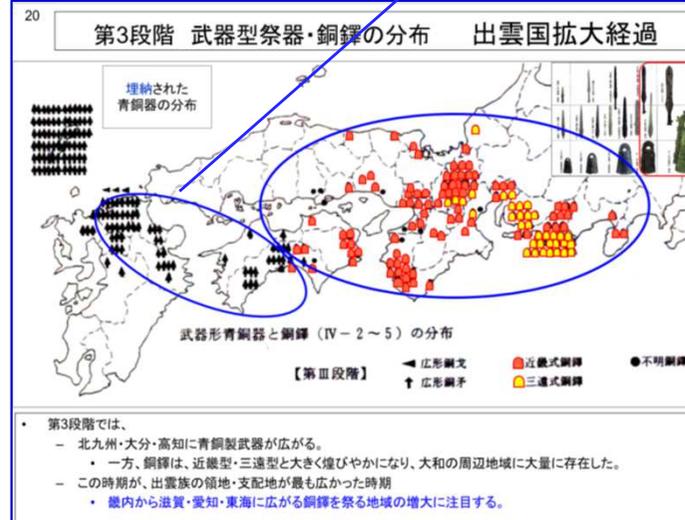
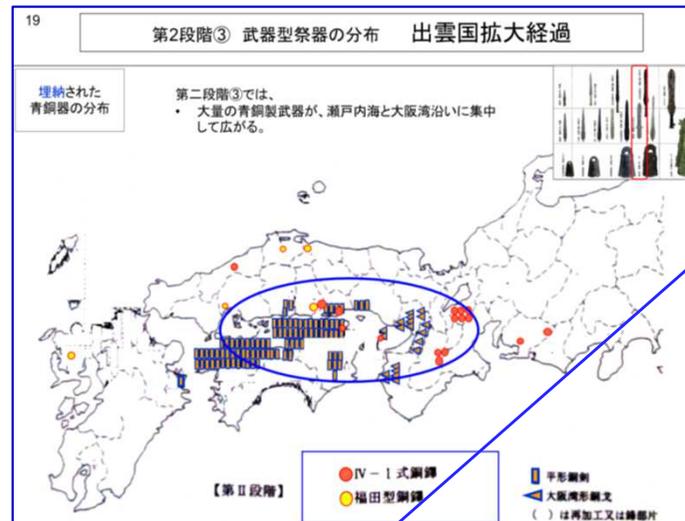
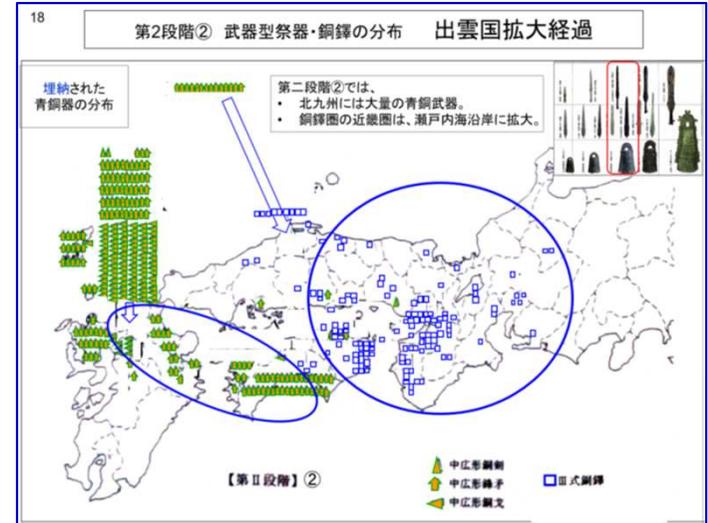
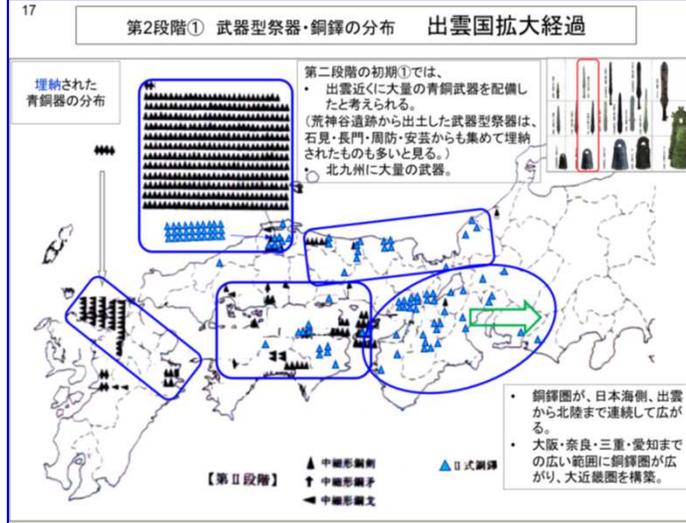
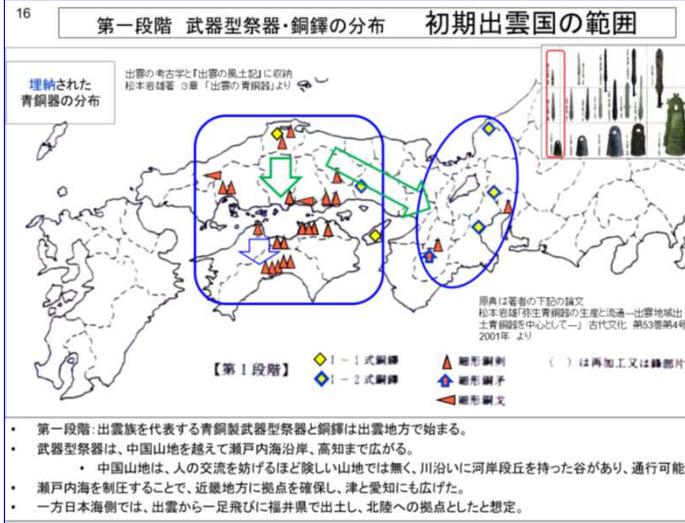
# 出土した戦傷死人骨は：勝者側？ 敗者側？

- 日本では、人骨は：
  - 殆どの土壌が酸性で、土中に埋められた骨は、消滅して、残らない。
  - 甕、壺、石棺など良い条件の墓では古い遺骨が残る。
    - 海岸の砂地で、貝殻を多く含む場合は、条件が良ければ、古い遺骨が残る。(土井ガ浜遺跡)
    - 低温・水中で保存され、粘土で覆われた場合、残るケースがある。(青谷上寺地遺跡)
- 戦場では：
  - 戦争に負けた側の死者・重傷者が残される。
  - 戦争に勝った側の死者・重傷者が残される。
    - 勝者の側は、仲間の死者・重傷者を、担いで、故郷へ戻す。
    - 敗者の側の、死者・重傷者は、そのまませて置かれ、地面に埋められる。決して後世には残らない。
- 墓・甕棺墓などに残る遺骨は、
  - 戦場で戦い、戦死又は負傷し、故郷へ連れ戻され、埋葬されたもの。 → 勝者側
- 例外：
  - 居住地域で、敵方に襲われ、死んだ場合、生き残った者が、死者を墓地に埋葬した場合、死者を砂浜に集めて葬った場合、そして、死者を集めて、堀・溝に投入した場合は、条件が良ければ、敗者の死傷者も、後世に残ることはある。(土井ガ浜遺跡・青谷上寺地遺跡)
- 敗者の側の受傷人骨は、戦傷死人骨遺跡(戦争遺跡)としては残らない。  
 出土した戦傷死人骨は勝者の側の死傷者のもの。(土井ガ浜/青谷上寺地などは例外で敗者のもの)  
**寺沢氏の戦傷死人骨を敗者のものとした、歴史解釈は、逆であったと考える。**  
**「戦傷死人骨(遺跡)は勝った側の死傷者のもの」**
- 寺沢著書に記載された：「多数の犠牲者を出した筑紫野市の永岡遺跡や惨殺死体のめだつ隈・西小田遺跡は、考古学者から「戦いに敗れたムラ」という不名誉なレッテルまで貼られてしまった。」このムラの実際は、多くの死傷者を出しながら、死傷した仲間を故郷に連れ帰った「勇者の村」であった。 **名誉を回復したい。**

# 青銅製祭器の埋納の「目的」と「地域分け」

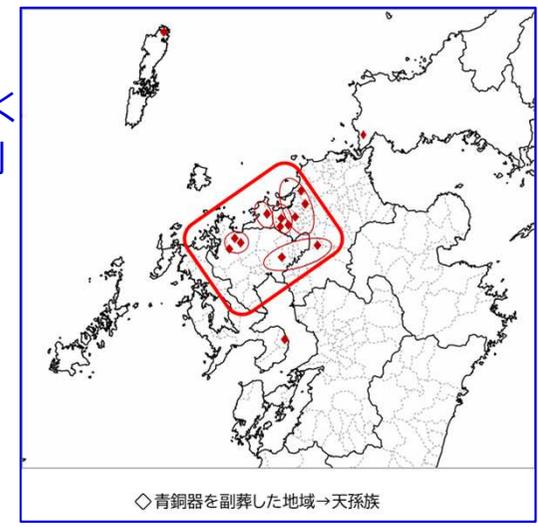
- 寺沢氏の埋納の目的には、疑問がある。
  - 地域の公的な行事であるならば、沢山の人を集め、全員で祈りを捧げながら行うはずで、辺鄙な場所で人目の触れ難い箇所に埋納されることはおかしい。
  - 役割を十分に果たした「銅鐸そのものの存在」が、次の時代には忘れられたことが、解せない。
- 埋納された青銅製武器型祭器・銅鐸の主生産地は、北九州地域で、ナ・イト国連合の地域。
  - イズモ・タニハ/キビ(瀬戸内)/近畿は、敵方のナ・イト国連合の地域で作ったものを祭器としていた。
    - 対価は何であったのだろうか？ 越・北陸・山陰で作った勾玉・管玉などであろうか？
    - 貴重な対価を払って入手した祭器は、祭りの道具/軍隊を鼓舞し・指揮するための旗印としては、極めて有用。
    - その貴重なものを、全てを、埋納してしまったことは、理解しがたい。
    - 主要地域だけでなく、北九州勢力から攻撃の恐れも無い、当時辺鄙な場所であった長野(柳沢遺跡)や愛知・東海に有った銅鐸などを含めて、埋納したことは、解せない。
    - 銅鐸の最終形態の近畿式・三遠式は、埋納のために豪華な形に作ったと、寺沢氏は言う。しかし、ナ・イト国との最終決戦のための呪禁(じゅごん)を行う場所が、九州から遠く隔たった畿内・愛知県や東海地方で行ったとするのは、不合理で、理解に苦しむ。
  - 本当に、イズモ・タニハ/キビ(瀬戸内)/近畿は、**自分たちの手で**、自分達を守り、鼓舞する青銅の祭器を、地中に埋めてしまったのだろうか。金色に輝いていたものを、錆びて二度と使えなくなる地中へ、しかも、直接、土が触れる状態で、埋めることができたのだろうか？
  - 埋納の時期に関して： 安本美典氏の講演会記録-204回 によると
    - 銅鐸の埋められた時期を推定する手がかり： 近年、銅鐸を埋めた穴の中や、穴を覆う土中に土器が発見された事例が4、5例ある(矢野、櫻井市の大福、羽曳野市の西浦、跡部など)。土器の年代から、これらはすべて弥生後期か、すぐあとの庄内式の時代といえる。
      - 埋納の時期は、特定の一時期に行われたことを示唆すると考えられる。
- ナ国イト国と考えられる福岡県糸島/早良/春日では、初期には青銅細型剣を勾玉・鏡などと墓に納めた。
  - 寺沢氏がシンボルと記した広型矛は副葬されない。ナ・イト国では、中形・広形を含めて青銅器は使用しなかったのでは？

---
- 埋納の目的は、実は、まったく違ったものでは？
  - 戦争の結果、**敗者の使用していた旗印・祭器を、二度と使えぬように土中に埋め、腐食せること。**
  - 戦いの勝者が、敗者に青銅の武器・銅鐸を集めさせ、それらをまとめて、辺鄙な人目の触れない場所で、秘密裡に埋納した。
    - 遠隔地で、期日内に、勝者の元へ持参できなかった場合は、同様の場所に、埋めさせた。
  - 弥生時代後期のある大きな戦争の終了時に、全ての埋納が行われた。



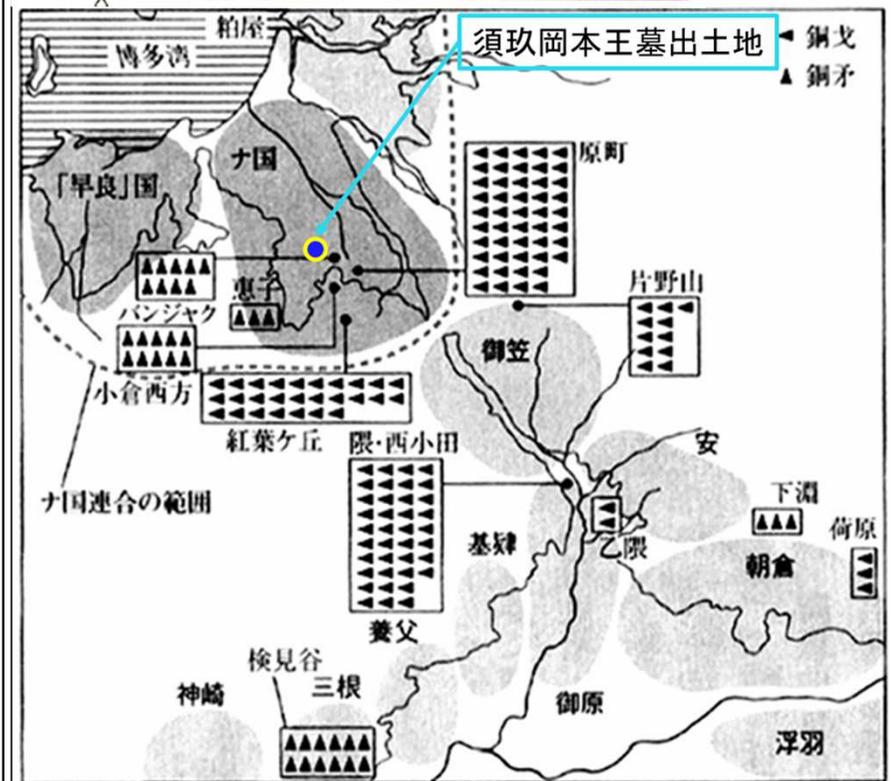
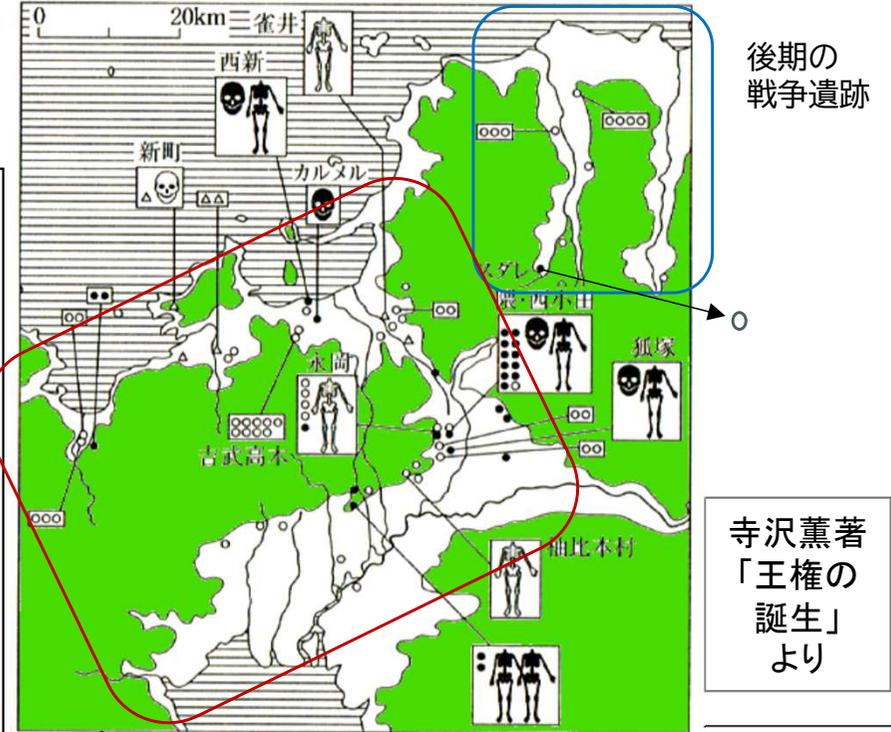
- 図の順序は、左上→右上 →左中→ 左下
- 最終段階: 左下の広形銅矛・銅戈だけを取り上げて、北九州全体と四国の一部をナ・イト国連合としたのは、何とも理解し難い。
  - 中細形銅矛・銅戈(中上)では、出雲で大量の埋納、北九州でも埋納あり。
  - 中広形銅矛・銅戈(右上)では、出雲でも北九州でも埋納が有る。
  - 広形銅矛・銅戈では、北九州と四国の一部に分布。
- ✓ 青銅製武器の発展全体を全国レベルで見ると、『北九州と四国の一部』を切り出すことは、不可思議。
- 右下図の青銅製武器を副葬した地域が、実は、青銅製武器・銅鐸の主要産地であった

- ✓ 製造から埋納までには、ある程度の期間がある筈、その期間中は、九州では、敵・味方が共に、金色に輝く青銅製武器をかざしていたとすると、敵・味方の区別が付かない。有り得ないこと。
- 副葬した地域(先進・工業地帯)と、そこから供給を受けた地域に勢力範囲を別けることの方が理解し易い。



# 北九州の戦況を、再検討する

- 「戦傷死人骨は勝者の人骨」との見方から再検討する。
  - 争ったのは、ナ・イト国連合とイズモ側の支援を受けた遠賀川の勢力
    - 弥生前期後半～中期前半
      - 北九州全域に○が多く、ある時は、イズモ側が勝ち、別の時は、ナ・イト国側が勝ったものとする。
      - 須玖岡本遺跡の状況から、この地域は敗北し、一旦、イズモ側になったと考えられる。
    - 弥生中期後半以降
      - 激しい戦いが行われ、ナ・イト国側に多くの戦傷者●を出したが勝利した。
        - 遠賀川側は、戦傷者を故郷に戻すことは出来ないほどに、敗退した。
      - この時期が「倭国大乱」にあたる。
      - 勝利したナ・イト国側は、敗者の旗指物であった青銅製銅戈・銅矛を、ナ国の王墓(須玖岡本遺跡)に集めて戦果を示した上、周辺の山中に埋納した。
      - 更に、隈・西小田・御笠・安・神崎の各地に、勝利した軍隊が戻る時には、打ち負かした敵の旗指物を戦果として持ち帰り、故郷に勝利の報告を行ない、埋納した。
- 北九州での倭国大乱とその最終大決戦に勝利したナ・イト国は、東方にあるイズモの拠点をそのままにしておくことは、禍根を残すことになるため、全面降伏させるため軍隊を出した。
  - それが、建御雷神の命が軍船で出かけた、「出雲の国譲り」の話となる。

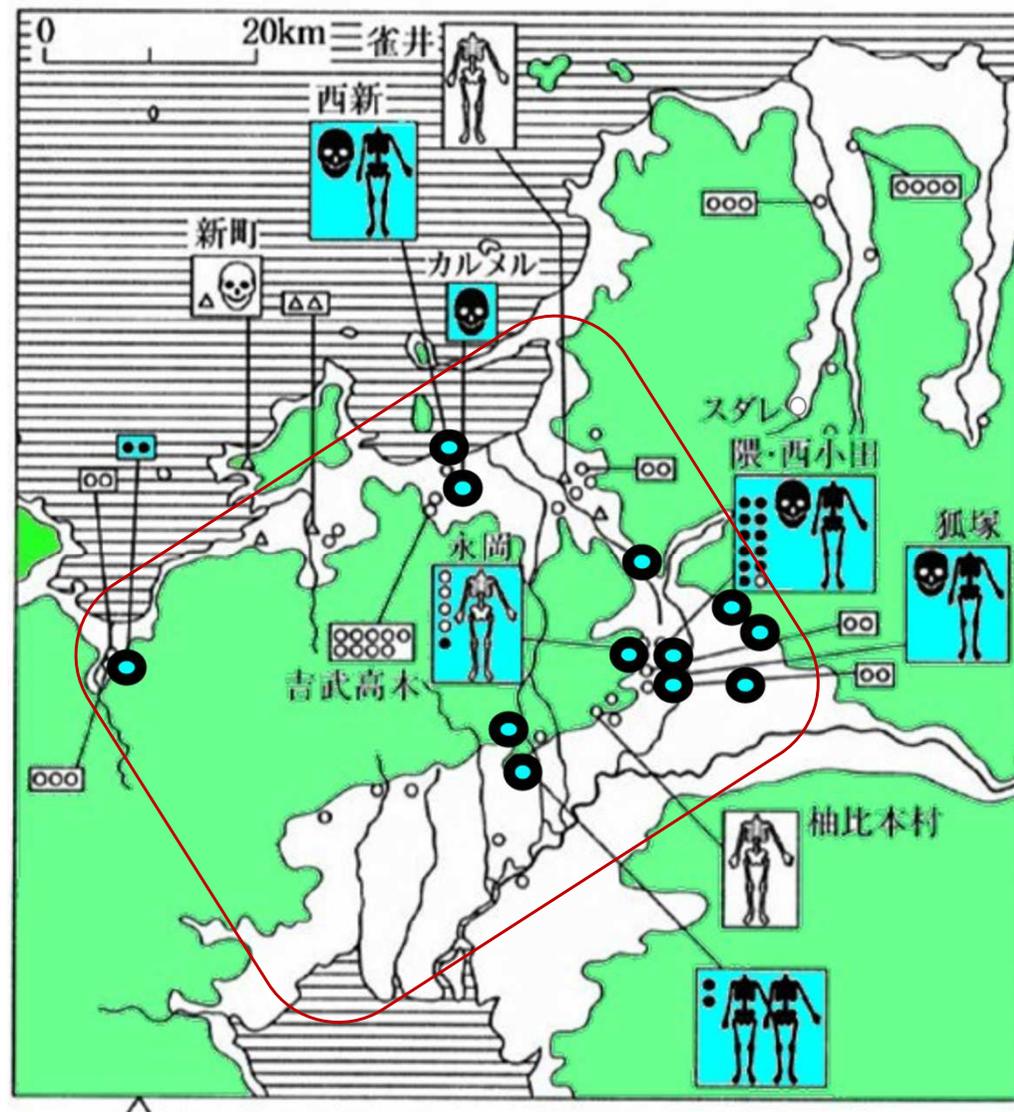
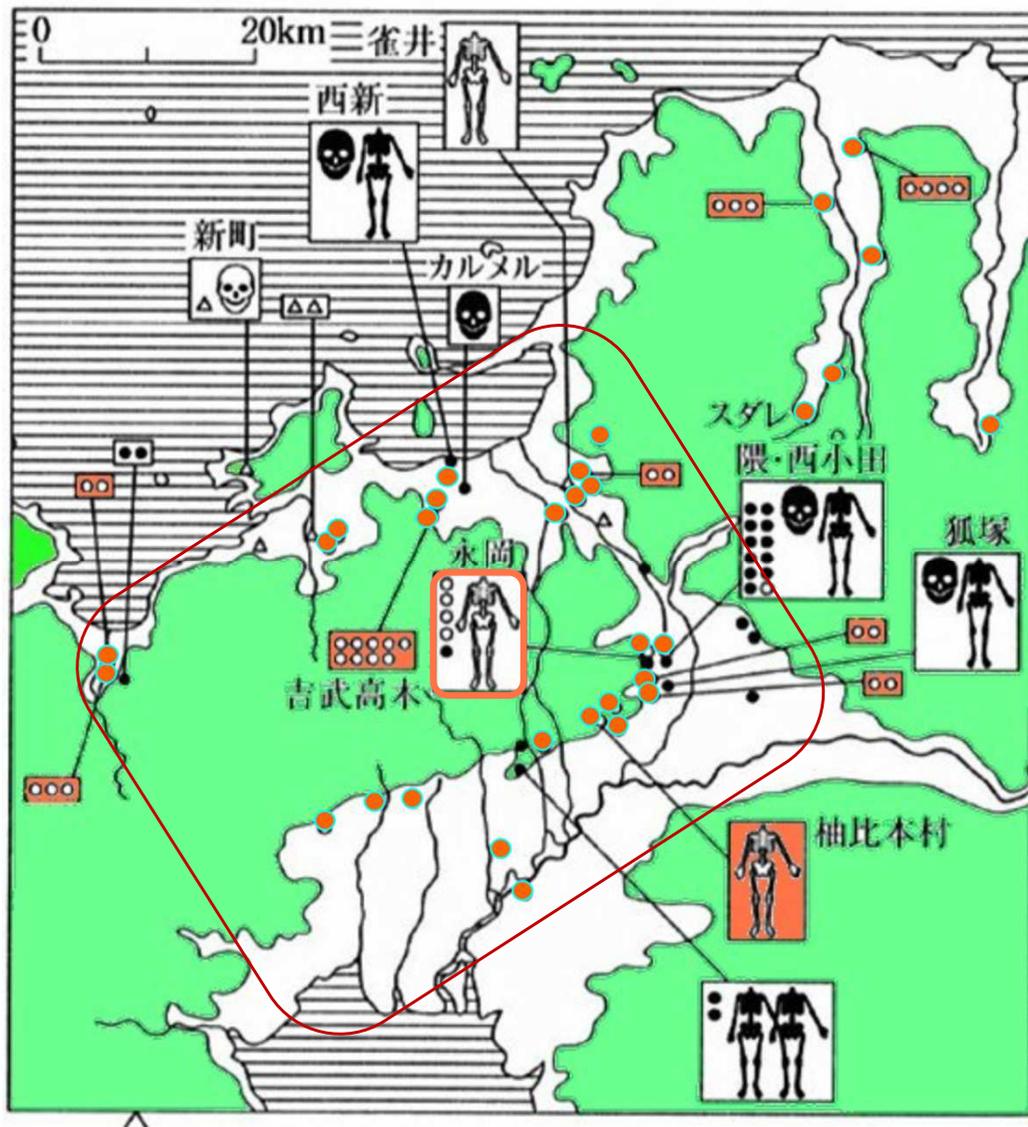


ナ国と周辺のケニゲニの呪禁

# 戦争遺跡 時期別色分け地図

●: 弥生 前期後半中期前半

●: 中期後半以降





# 高地性集落

- 寺沢氏の認識：
  - 弥生時代の高地性集落は実戦用の山城というより、有事に備えた危機管理施設なのである。
  - 列島規模で戦争が繰り返されたという考古学的な証拠はほとんどない。
  - 際立って多くの戦傷死人骨(遺跡)の見られる北九州では、高地性集落が無かったことは、戦争＝高地性集落とはならないことを示している。(何故、高地性集落が発掘・発見されないのかは、不明)
  
- 第二次高地性集落の時期になって、急に出現する地域が存在する。
  - 集団虐殺のあった青谷上寺地遺跡の付近 及び 北陸・新潟・長野の地域
  - 戦傷死人骨(遺跡)が多く出土した大阪湾周辺地域
  - 上記の地域は、古事記・日本書紀の中で、「出雲の国譲り」と「神武東征」に登場する地域であるが、『もはや『記紀』の内容をそのまま経時的な歴史史料として対象化する研究者はほぼいないだろう。』とする寺沢氏は、この関係を見捨てる。
  
- 神話と伝承から高地性集落を考える：丸地の理解
  - 「出雲の国譲り」： 国譲りに異を唱えた建御名方神と、建御雷神は力競べを行う：これが青谷上寺地の惨殺と、解釈。  
北陸の高地性集落は、建御名方神の逃避行を追う建御雷神の到来をいち早く発見し、伝達するため。(同上)  
新潟県直江津(上越市)から長野までは、逃避行を追う建御雷神を発見・伝達するため。(同上)
  - 「神武東征」： 大阪湾沿岸・生駒山地沿いの高地性集落は、五瀬/神武軍の到来に備えたもの(同上)  
三重県・愛知・東海方面の高地性集落は、五瀬/神武が東側から大和を襲来するとの転進に備えた。(同上)
  - 記紀の従来の読み方では、「出雲の国譲り」と「神武東征」の間には、長い・長い時間の差があるが、2つの事件には、共通の登場人物がいます。事代主＝大物主です。国譲りを了承した人物であり、神武の正妃の父親で、2つの事件は同一世代で発生した事件です。共に、弥生時代の終わりの時期です。従って、「出雲の国譲り」と「神武東征」は連続して起きたことになる。
  
- 寺沢氏の考える高地性集落と戦争：
  - 「北九州統一勢力」と「九州以東の勢力」の争いとの概念では、高地性集落の意義は、生まれないかも知れません。
  - 「出雲の国譲り」と「神武東征」が数世代以上の時間差のある事件と認識した場合には、上記の認識には至らないでしょう。
  
- ✓ 敵対する地域勢力の認識が違い、戦傷死人骨の勝者/敗者の認識が違い、埋納の認識が違っていると、結果として高地性集落の認識も大きく違うことになった。

## 2014年寺沢薫氏の訂正された高地性集落地図 「弥生時代の年代と交流」

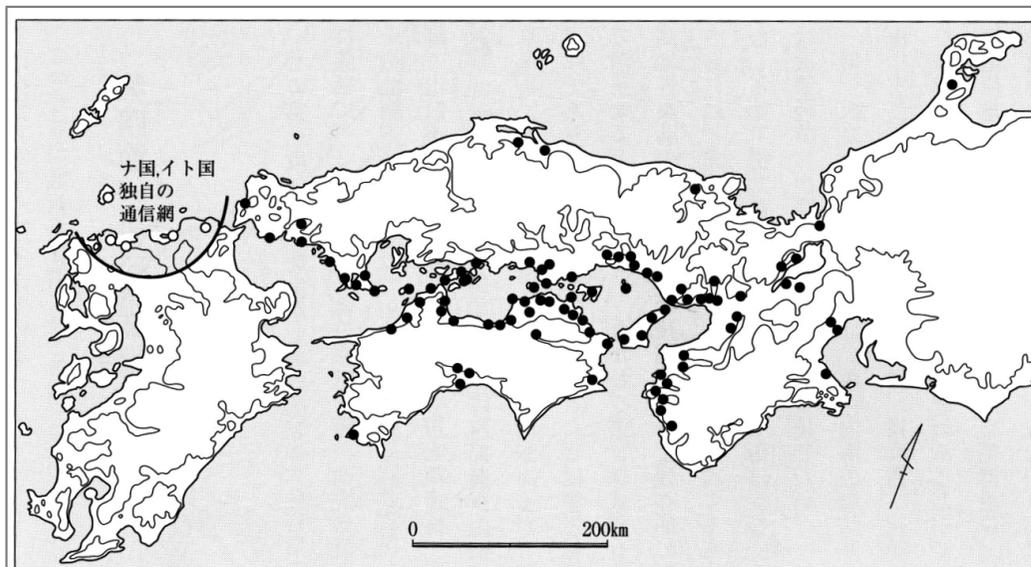
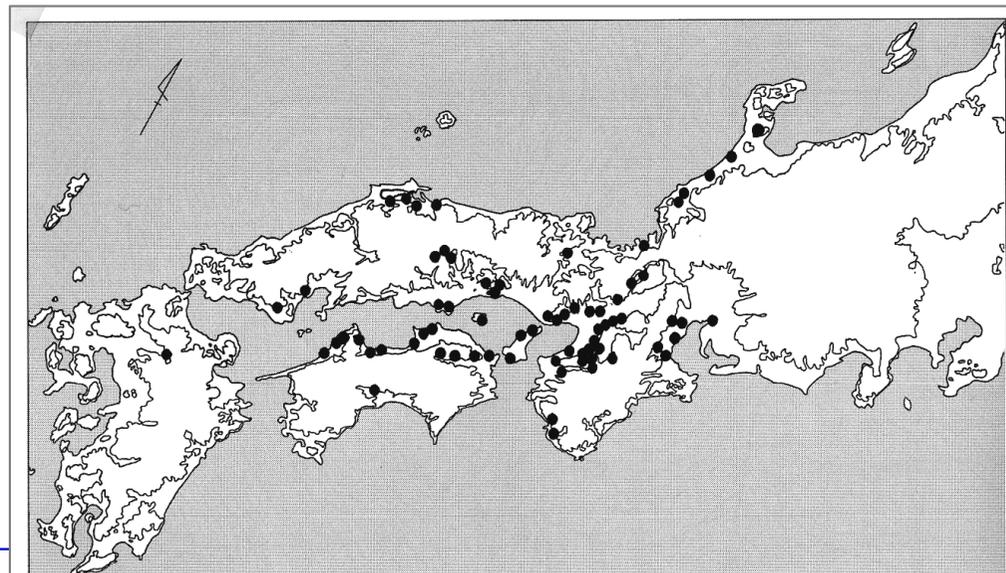


図103 典型的（第1類型）な第1次高地性集落の分布

←第1次高地性集落



第2次高地性集落→

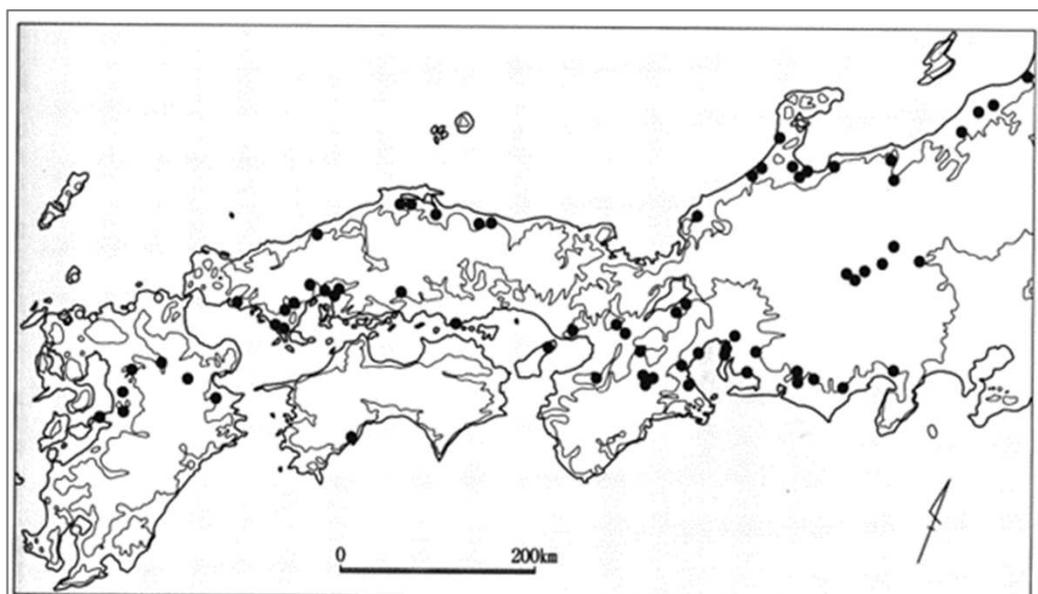


図131 おもな第3次高地性集落の分布

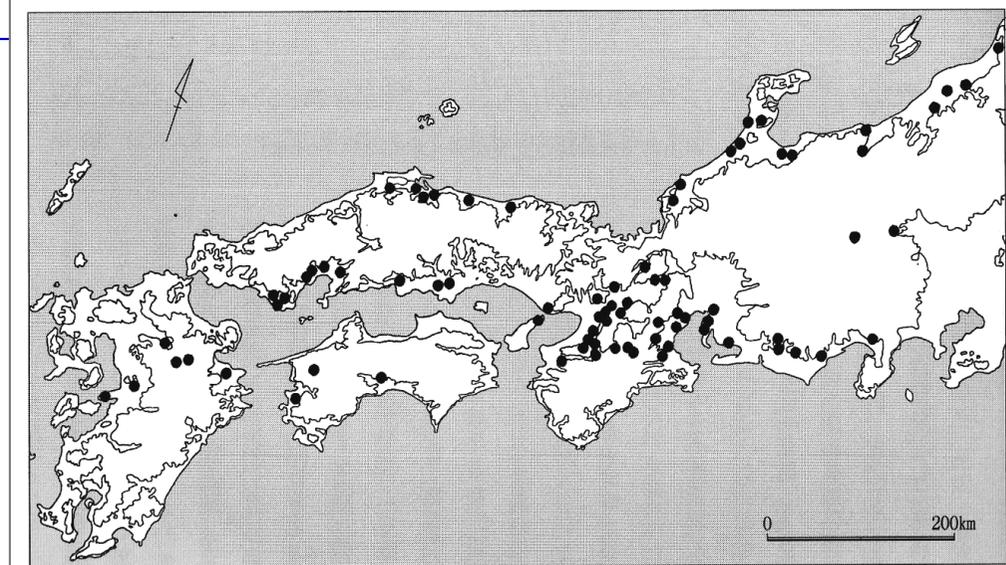
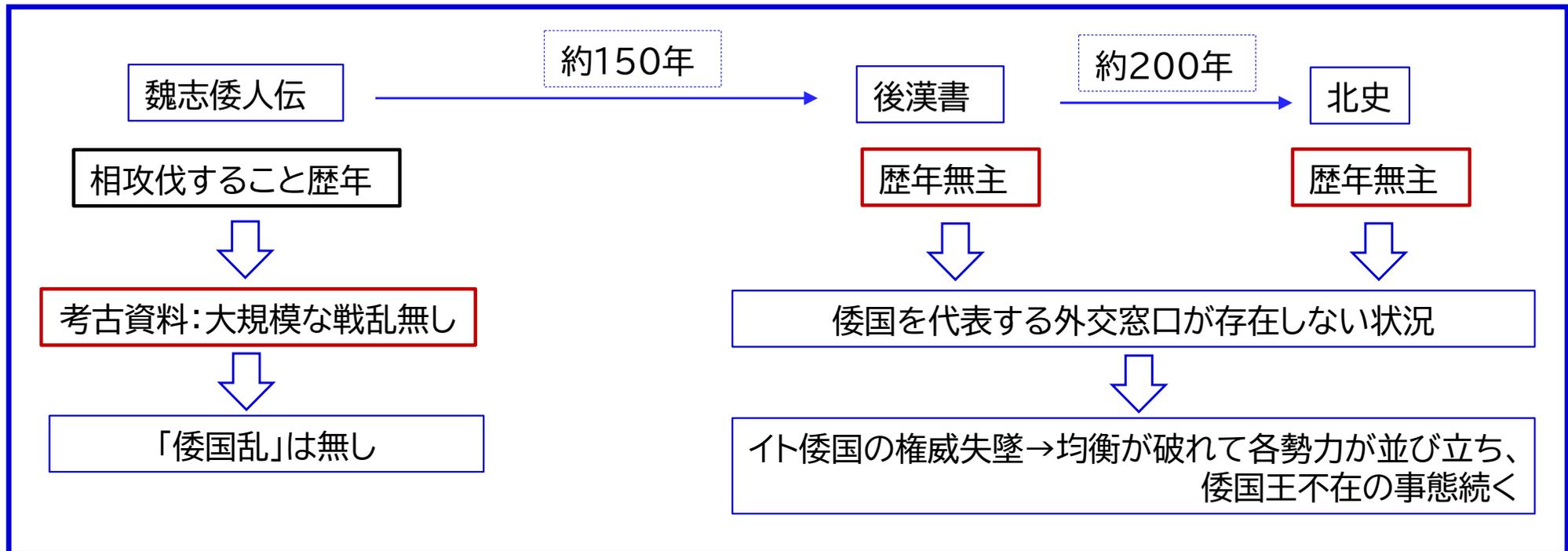


図121 典型的（第1類型）な第2次高地性集落の分布（上：後期中半～中頃，下：後期中頃～後半）

←第3次高地性集落

## 二世紀末の政治的混迷 : 「後漢王朝の衰退によって、イト倭国の権威失墜」について

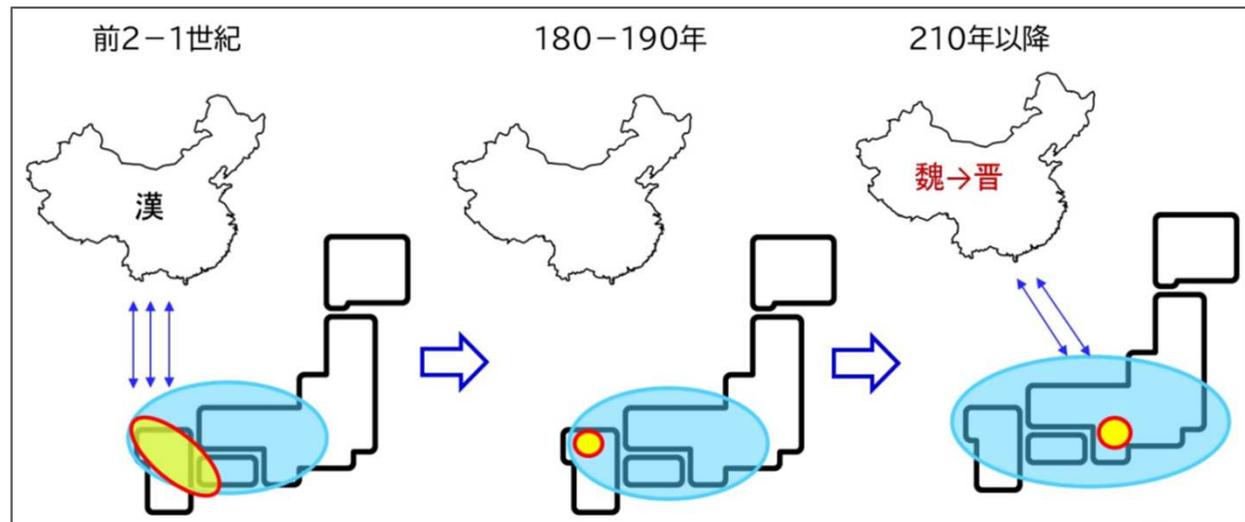
- 寺沢薫氏は、180-190年に「後漢王朝の衰退によって」、「イト倭国の権威失墜」し、均衡が破れて各勢力が並び立ち、倭国王不在の事態続く、と記している。その結果、倭国乱が発生し、卑弥呼共立に至ったとしている。
  - 高地性集落の日本全国展開の図から、考古学的には日本全土にまたがる戦乱状況は無かったと記し、倭国大乱は、日本の戦国時代のような戦乱で無かったと結論付けた。
- その代わりに、上記の『後漢衰退→イト倭国権威失墜→各勢力が並び→倭国王不在』の事態が発生とした。



- 外交史料と誤った考古史料解釈で、魏志倭人伝の記述を否定し、国々が並び立ったとの新解釈を示した。
- 史料価値の高い「魏志倭人伝」の記述を、150年/200年後に書かれた史料を使って否定している。(後述:史料批判参照)
- 魏志倭人伝に記した事実が無かったとする考古史料解釈自体が誤っていたのではないか。
- 倭国乱を「日本全国・各地で戦乱が発生した」との解釈の外に、「倭国の領内=北九州全域で戦乱が発生した」という解釈もあり得る。 後者は、戦傷死遺跡・戦争遺跡の分布を見れば明瞭で、証明される。考古学データに合致。

# 戦傷遺跡/埋納/高地性集落から見た邪馬台国のシナリオ

- 最初は、北九州の勢力が**圧倒的で**、吉備・出雲・瀬戸内・近畿も王族が居て対抗していた。
  - 戦傷死人骨から見ると、**北九州全域で戦乱が広がり戦死傷者が多く**、出雲・瀬戸内では戦死傷者は軽微。
  - 高地性集落は、戦争に備えるもので、北九州にはその備えは無く、瀬戸内から東は十分に備えた。
    - しかも、実際に使われた形跡はなく、**北九州側からの攻撃は、成功しなかった。**
- ~~吉備・出雲・瀬戸内・近畿では、北九州勢力に対抗して青銅祭器を埋納し、積極的に呪禁(じゅごん)を行った。~~
  - ~~九州内でも、お互いに青銅祭器を埋納し、呪禁を行った~~
- 180-190年頃/二世紀末の政治的混迷 : **漢の後ろ盾を失ったイト倭国の権威失墜し、国同士の均衡が破れて日本全土で、倭国大乱(各勢力が並び立ち、主の居ない状況)となった。**
  - ~~しかし、信長/秀吉/家康の戦国時代の様な全国的な戦乱にはならなかった。~~
- 210年頃、吉備・出雲・瀬戸内・近畿の勢力が中心となって、**ヤマトに居た卑弥呼を共立。**
  - ~~戦争の終結の願う、北九州のイト倭国も、武力を象徴しない女王であることから共立に賛成。~~
  - ~~ヤマトの纏向の地を基盤として女王の王権が成立し、魏の後ろ盾を得て、安定。~~
  - ~~ヤマト王権に繋がる。~~



## 戦傷遺跡/埋納/高地性集落から見た別の邪馬台国のシナリオ

- ナ・イト国連合が、吉備・出雲・瀬戸内・近畿側(イズモと略す)に属する遠賀川流域とが、対抗していた。
  - 戦傷死人骨から見ると、北九州全域で戦いが有り、ナ・イト国とイズモが、ある時は勝ち、別の時は負ける拮抗した状況があった。イズモが優勢の状況となった。
  - 須玖岡本(ナ国の本拠地)はイズモに破れ、占領された模様。ナは那珂川流域から糸島・平原に移りイト国となった。
  - 一方、中国四国以東では、イズモ(出雲)は、その勢力範囲を瀬戸内側に、四国の瀬戸内側・太平洋側に拡大した。その戦いに対して、在地の勢力が、イズモに対抗するために、高地性集落をつくったが、イズモが戦いに勝ち続け、勢力範囲とした。それらの戦いの中で、青銅製武器型祭器は、旗印として役立った。
  - 更に、勢力範囲は、畿内・北陸・東海・関東と拡大した。その時々で、銅鐸が、支配に有用であった。
  - 200年頃、イズモ側は、支配地が東方へ拡大し、領土が広大になったため、支配地の真ん中に、新しい支配拠点を築くため、大和の纏向地域を整備し、新たな王城の建築に取り掛かった。
- 220年頃に、
  - イト国は、勢力の挽回に力を入れ、軍備を整え、神崎(吉野ヶ里)・隈・西小田などの残存部隊と協力して、福岡平野で決戦を挑み、イズモ側を激戦の末に破った。イズモ側は、吉備・出雲・瀬戸内・近畿からの援軍を出し、激戦は数年間に及んだ。この戦いが「倭国乱」。
    - 決戦に勝ったイト国側は、敗者イズモ側の旗印であった青銅製武器型祭器を埋納した。
  - 北九州で勝利したイト国は、残存するイズモの勢力の拠点である出雲に全面降伏を迫るため、軍船に使者を載せ出雲へ向かわせた。抵抗する建御名方神を降伏させ、「出雲国譲り」に成功。
    - イズモ側の祭器(青銅製武器・銅鐸)を全国で、完全に、埋納した。
- 230年頃、
  - 出雲国譲りの結果、イト倭国は、支配すべき地が東方に拡大したことを受け、本拠地を支配地の真ん中に移すことを決断した。
  - 北九州に残る軍勢を集め、船群を作り、瀬戸内海から大和へ向けて、出発した。(神武東征)
  - 本隊が東へ移動するため、北九州の守りと留守部隊が課題となった。
    - 留守部隊は、負傷兵・老人・子供・女で構成された。東征の兵の妻たち・戦死者の妻たちが、主役となった。
      - 留守部隊:女達を束ねるためにも、女王卑弥呼が擁立(共立)された。
      - 留守部隊は、外敵から守り易い地域に支配拠点を移した。

# 寺沢薫氏の邪馬台国論の基本的な間違い

- 『邪馬台国は文献上の**存在**である。』(伊藤雅文)
- 邪馬台国と卑弥呼は、中国の史書の中にだけ存在する。(邪馬台国と書いた土器も青銅器も無い)
  - 『文献上の存在を考古学で実証的に検証する。』これがあるべき姿と考える。(丸地)
    - 理想的には、『中国の史書』の中の**存在**を考古学と「日本の文献」で検証する』ことが望まれる。
- 寺沢氏は、中国の史書を『たかだか2000文字に満たない漢文をあれこれ詮索して、この国の三世紀史をうんぬんする時代は終わった。』と軽視。
  - しかし、邪馬台国は、中国史書上にしか無いため、『たかだか2000文字に満たない漢文』によって、規定されている。
    - **価値の無いの中国史書で定義した対象物を、科学である考古学で検証する。**これでは意味が無い。
    - **中国史書をまともに検証した上で、その対象物を考古学で検証することが望ましい。**
- ✓ **中国史書をまともに検証**するには、歴史学の基本である「**史料批判**」を行って、検証された内容・事実によって歴史として理解することが欠かせない。
  - 寺沢氏は、自分の都合の良い処だけを取り、邪馬台国・卑弥呼を規定している。
    - 解釈上不利となる里程・方位などには一切触れない。
  - 中国史書の解釈をする場合にも、史料批判は欠かせない。(寺沢氏は史料批判を行っていない。)
    - 史料的価値の無い、梁書や日本書紀の神功皇后関連の記述を根拠として、論を構成するという、基本的な間違いを犯している。
      - 史料批判を行えば、魏志倭人伝と梁書を、対等に信頼することは無い。
- 日本の文献に関しては、『古代史としては「記紀」は無視』をしており、基本的に触れない。
  - 「出雲国譲り」や「神武東征」は、考古学の発掘成果が実在が証明しているにも拘らず、「戦後の古代史研究の成果」として、無視を決め込んでいる。
    - 神話部分も、登場人物から経時的な歴史史料として読み直せることを知って欲しい。

## 『邪馬台国は文献上の存在である。』

## • 『邪馬台国は文献上の存在である。』(伊藤雅文)

魏志倭人伝 全文(紹興本) 倭人在帶方東南大海之中依山島爲國邑舊百餘國漢時有朝見者今使譯所通三十國從郡至倭循海岸水行歷韓國乍南乍東到其北岸狗邪韓國七千餘里始度一海千餘里至對馬國其大官曰卑狗副曰卑奴母離所居絕島方可四百餘里土地山險多深林道路如禽鹿徑有千餘戶無良田食海物自活乘船南北市糴又南渡一海千餘里名曰瀚海至一大國官亦曰卑狗副曰卑奴母離方可三百里多竹木叢林有三千許家差有田地耕田猶不足食亦南北市糴又渡一海千餘里至末盧國有四千餘戶濱山海居草木茂盛行不見前人好捕魚鱧水無深淺皆沈沒取之東南陸行五百里到伊都國官曰爾支副曰泄謨觚柄渠觚有千餘戶卅世有王皆統屬女王國郡使往來常所駐東南至奴國百里有官曰卑奴副曰卑奴母離有千餘戶東行至不彌國百里有官曰多模副曰卑奴母離有千餘家南至投馬國水行二十日官曰彌彌副曰彌彌那利可五萬餘戶南至邪馬壹國女王之所都水行十日陸行一月官有伊支馬次曰彌馬升次曰彌馬獲支次曰奴佳鞮可七萬餘戶自女王國以北其戶數道里可得略載其餘旁國遠絕不可得詳次有斯馬國次有已百支國次有伊邪國次有都支國次有彌奴國次有好古都國次有不呼國次有姐奴國次有對蘇國次有蘇奴國次有呼邑國次有華奴蘇奴國次有鬼國次有爲吾國次有鬼奴國次有邪馬國次有躬臣國次有巴利國次有支惟國次有鳥奴國次有奴國此女王境界所盡其南有狗奴國男子爲王其官有狗古智卑狗不屬女王自都至女王國萬二千餘里男子無大小皆黥面文身自古以來其使詣中國皆自稱大夫夏后少康之子封於會稽斷髮文身以避蛟龍之害今倭水人好沈沒捕魚給文身亦以厭大魚水禽後稍以爲飾諸國文身各異或左或右或大或小尊卑有差計其道里當在會稽東冶之東其風俗不淫男子皆露髮以木絲招頭其衣橫幅但結束相連略無縫婦人被髮屈紉作衣如單被穿其中中央貫頭衣之種禾稻紵麻蠶桑繅績出細紵縹絲其地無牛馬虎豹羊鵠兵用矛楯木弓木弓短下長上竹箭或鐵鏃或骨鏃所有無與擔耳朱崖同倭地溫暖冬夏食生菜皆徒跣有屋室父母兄弟臥息異處以朱丹塗其身體如中國用粉也食飲用蓬豆手食其死有棺無槨封土作冢始死停喪十餘日當時不食肉喪主哭泣他人就歌舞飲酒已葬學家詣水中澡浴以如練沐其行來渡海詣中國恒使一人不梳頭不去蟻蟲衣服垢汚不食肉不近婦人如喪人名之爲持表若行者吉善共顧其生口財物若有疾病遭暴害便欲殺之謂其持表不謹出真珠青玉其山有丹其木有柎杼豫樟檉投檉烏號楓香其竹篠籜桃支有薑橘椒薑荷不知以爲滋味有獼猴黑雉其俗舉事行來有所云爲輒灼骨而下以占吉凶先告所卜其辭如令龜法視火坵占兆其會同坐起父子男女無別人性嗜酒(魏略曰其俗不知正歲

四節但計春耕秋收爲年紀)見大人所敬但搏手以當跪拜其人壽考或百年或八九十年其俗國大人皆四五婦下戶或二三婦婦人不淫不妬忌不盜竊少諍訟其犯法輕者沒其妻子重者滅其門戶及宗族尊卑各有差序足相臣服收租賦有邸閣國國有市交易有無使大倭監之自女王國以北特置一大率檢察諸國諸國畏憚之常治伊都國於國中有如刺史王遣使詣京都帶方郡諸韓國及郡使倭國皆臨津搜露傳送文書賜遺之物詣女王不得差錯下戶與大人相逢道路遂巡入草傳辭說事或蹲或跪兩手據地爲之恭敬對應聲曰噫比如然諾其國本亦以男子爲王住七八十年倭國亂相攻伐歷年乃共立一女子爲王名曰卑彌呼事鬼道能惑衆年已長大無夫婿有男弟佐治國自爲王以來少有見者以婢千人自侍唯有男子一人給飲食傳辭出入居處宮室樓觀城柵嚴設常有人持兵守衛女王國東渡海千餘里復有國皆倭種又有侏儒國有其南人長三四尺去女王四千餘里又有裸國黑齒國復在其東南船行一年可至參問倭地絕在海中洲島之上或絕或連周旋可五千餘里景初二年六月倭女王遣大夫難升米等詣郡求詣天子朝獻太守劉夏遣東將送詣京都其年十二月詔書報倭女王曰制詔親魏倭王卑彌呼帶方太守劉夏遣使送汝大夫難升米次使都市牛利奉汝所獻男生日四人女生日六人班布二匹二丈以到汝所在踰遠乃遣使貢獻是汝之忠孝我甚哀汝今以汝爲親魏倭王假金印紫綬裝封付帶方太守假授汝其綬無種人勉爲孝順汝來使難升米牛利涉遠道路勤勞今以難升米爲率善中郎將牛利爲率善校尉假銀印青綬引見勞賜遣還今以絳地交龍錦五匹(台松)以爲地應爲綿漢文帝著皂衣謂之弋絳是也此字不體非魏朝之失則傳寫者誤也)絳地縹栗屬十張縹絳五匹細青五匹蒼汝所獻貢直又特賜汝紺地句文錦三匹細班華屬五張白絹五十匹金八兩五尺二口銅鏡百枚真珠鈿丹各五十斤皆裝封付難升米牛利還到錄受悉可以示汝國中人使知國家哀汝故鄭重賜汝好物也正始元年太守弓遵遣建中校尉梯儁等奉詔書印綬詣倭國拜假倭王并齎詔賜金帛錦屬刀鏡采物倭王因使上表荅謝詔恩其四年倭王復遣使大夫伊聲耜掖邪狗等八人上獻生口倭錦絳青縹絲衣帛布丹木短弓矢掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬其六年詔賜倭難升米黃幢付郡假授其八年太守王順到官倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌呼素不和遣倭載斯烏越等詣郡說相攻擊狀遣塞曹掾史張政等因齎詔書黃幢拜假難升米爲檄告諭之卑彌呼以死大作家徑百餘步狗葬者奴婢百餘人更立男王國中不服更相誅殺當時殺千餘人復立卑彌呼宗女壹與年十三爲王國中遂定政等以檄告諭壹與壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人送政等還因詣臺獻上男女生口三十人貢白珠五千孔青大句珠二枚異文親錦二千匹

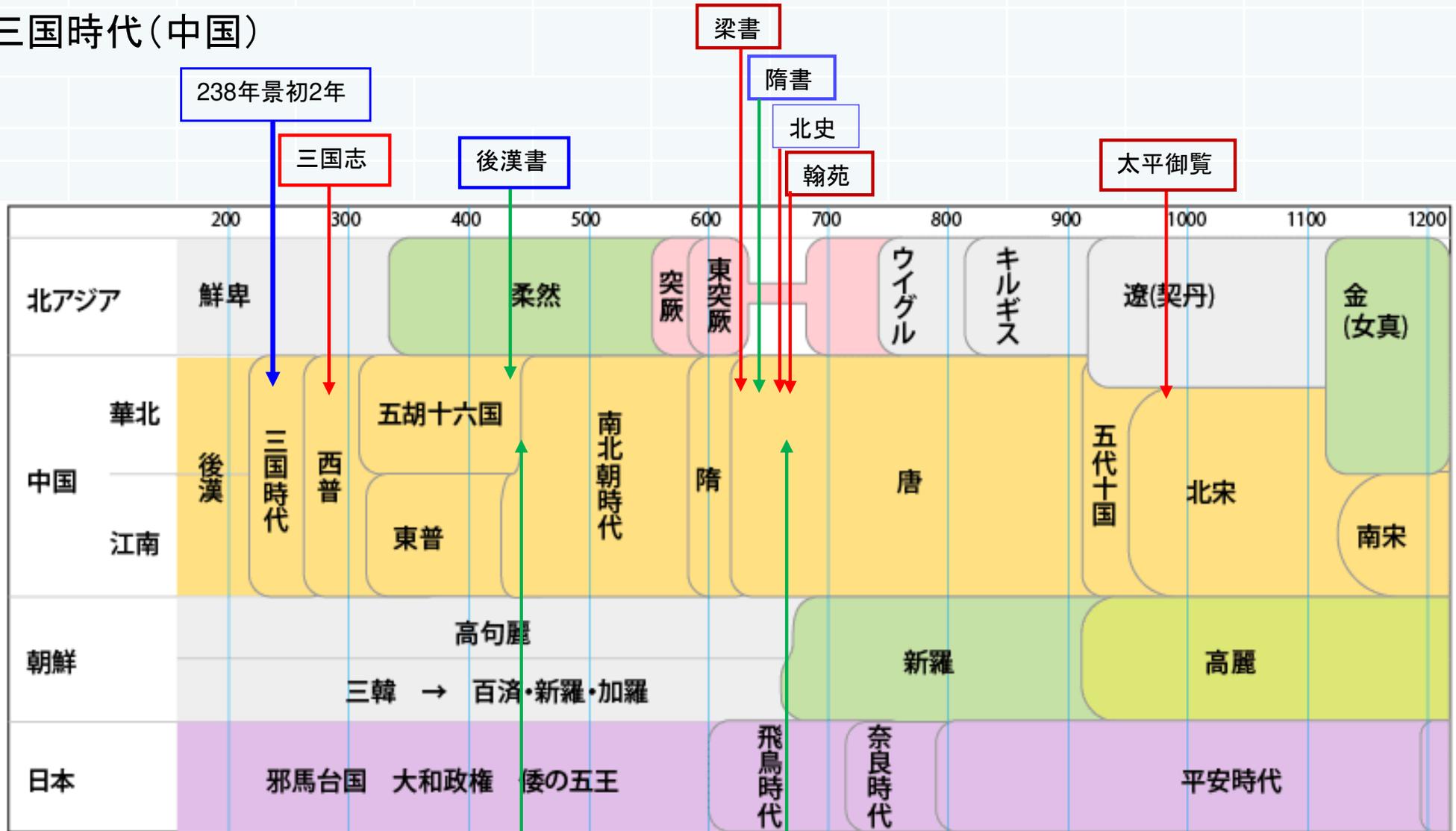
# 「史料批判」

- 「史料批判」という言葉を知らない人が多いと思われるので、歴史研究の基本なので、紹介する。
    - この紹介は、「古代史を解明する会」第4回「邪馬台国論」2021年3月27日の資料の一部を使う。
  - 歴史研究を開始とする学生が、最初に学ぶことが「史料批判」。
    - 歴史の研究には、材料となる史料が必要。
      - その史料を使って、歴史を語ったり、論を述べることになる。
        - 最初にやるべきことは、その史料の信頼性を調べること。
      - 史料が、偽物でなく、真実を記していることが証明されると、初めてその史料が使える。
        - いくら理屈の合った論を述べても、基の史料が虚偽のものであれば、意味が無い。
      - 史料全体に誤りが有り、信頼性が低い場合には、
        - その史料を使わないことが原則。
        - 但し、その一部が重要で、どうしても論証に使う場合には、その使用する部分について、信ぴょう性が有ることを、改めて、証明することが求められる。
    - 「史料批判」は、文献史料では勿論だが、考古史料やその外の資料に於いても、必要なことは言うまでもない。
    - 日本の古代史では、この「史料批判」が行われていないのが現状。これが、混乱を招いている。
- 
- 「卑弥呼トヤマト王権」で問題になった魏志倭人伝・梁書について、第4回「邪馬台国論」で触れているので、その時の資料から、中国の史書について、再び、史料批判を説明する。

# 各書籍の書かれた時期一覧

<https://sekainorekisi.com/glossary/%E4%B8%89%E5%9B%BD%E6%99%82%E4%BB%A3%EF%BC%88%E4%B8%AD%E5%9B%BD%EF%BC%89/>

## 三国時代(中国)



世界の歴史まっぷ

東アジア世界の形成と発展 ©世界の歴史まっぷ

後漢書の注

220~280年 中国で後漢の滅亡後、魏・呉・蜀の三国が分立した時代。魏・呉・蜀の抗争を経て、280年に呉が晋(西晋)に滅ぼされて三国時代は終わった。

# 魏志倭人伝 と 外の倭人伝・倭国伝

- 魏志倭人伝(三国志)の評価が高い理由は、著者:陳寿の優れた記述に加えて、
  - ① 魏の公式の使節が訪問し、その報告書をもとに記述された。
  - ② 専門知識を持った植物・動物・地理・社会学などのプロを同行させ組織的な訪問記録とみられる事。
  - ③ 更に、複数年、倭国に滞在した帯方郡の張政の報告書も、記述の裏付けとなっている。
- 呉との最終抗争の中で、外交戦略上、倭国の情報を必要としていた魏の国策がそのバックにある。
- 三国志以降の倭人伝・倭国伝(後漢書・宋書・梁書・隋書など)は、何に基づいて記述されたか？
  - 倭の五王の朝見などの使節からの情報が有った可能性もあるが、それは、限定的情報とみられる。
  - 600年から遣隋使が始まり、630年に遣唐使が開始する。従って、梁書・隋書は、その使節からの情報を入手できた可能性はあるが、その情報収集は、やはり、限定的と考えられる。
  - 後漢書の場合、新たな有力な日本情報は無かったと推察する。
    - 倭国乱の時期を桓・靈の間(146年 - 189年)と具体的に記述しているが、情報の入手先は疑問で、陳寿の不採用とした史料を見たのか、著者の単なる推察なのかも不明。信頼性は無い。
  - 宋書の倭国伝は、倭の五王の朝見記録等から記述したものもあるが、邪馬台国時代の記述は無い。
  - 梁書は、魏志・後漢書の引き写しと思われるが不正確。誤字多し。猟奇的な内容を含み信頼性無し。
  - 隋書は、魏志(三国志)・後漢書を参照したのは明らかだが、中国の未開地に対する偏見をそのまま記述し、信頼性は無い。
- 三国志(魏志倭人伝)以降の中国史書の邪馬台国に関する記述には、信頼性が無く、魏志倭人伝と異なる情報が記された場合には、その情報は信頼できない。
  - 「魏志倭人伝と異なる情報」を根拠にする場合には、別途、情報の信頼性を評価が必要。『史料批判』
  - 裴松之(372年 - 451年)の注釈も、同様なことが言える。
    - (魏略曰 其俗不知正歳四節 但計春耕秋收 為年紀)「魏略いわく、その習俗では正月(陰暦)や四節を知らない。ただ春に耕し、秋に収穫したことを数えて年紀としている。」これも「中国の未開地に対する偏見」で、陳寿の採用しなかった文言を、魚豢(魏略の著者)が報告書の中から搜したものか？

倭者、自云太伯之後。俗皆文身。去帶方萬二千餘里、大抵在會稽之東、相去絶遠。

倭とは、**自らは太伯の後裔だという**。俗は皆、身体に刺青をする。帯方郡から一万二千余里、およそ会稽郡の東に在り、互いに絶海の遠方である。

対馬が無い

未盧国とは違う

\*\*

從帶方至倭、循海水行、歴韓國、乍東乍南、七千餘里始度一海。海闊千餘里、名瀚海、至一支國。又度一海千餘里、名未盧國。又東南陸行五百里、至伊都國。又東南行百里、至奴國。又東行百里、至不彌國。又南水行二十日、至投馬國。又南水行十日、陸行一月日、至邪馬臺國、即倭王所居。其官有伊支馬、次曰彌馬獲支、次曰奴往鞮。

帯方郡から倭に行くには、海を巡って韓国を経て、東へ南へと航行すること七千余里で、**初めて一海を渡る。海の広さは千余里、名は瀚海、「一支国」に至る。また一海を渡ること千余里、名は「未盧国」。**また東南に陸行すること五百里、「伊都国」に至る。また東南に行くこと百里、「奴国」に至る。また東に行くこと百里、「不彌国」に至る。また南に水行すること二十日、「投馬国」に至る。また南に水行すること十日、陸行すること一カ月で、「邪馬臺国」に至る。すなわち倭王が居する所である。その官には伊支馬があり、次は彌馬獲支といい、次は奴往鞮という。

民種禾稻紵麻、蠶桑織績。有薑、桂、橘、椒、蘇。出黑雉、真珠、青玉。有獸如牛、名山鼠。又有大蛇吞此獸。蛇皮堅不可斫、其上有孔、乍開乍閉、時或有光、射之中、蛇則死矣。

民は水稻や紵麻の種をまき、養蚕して絹織物を紡ぐ。薑、桂、橘、椒、蘇がある。黒雉、真珠、青玉を産出する。**牛のような獣がおりる、名は山鼠。また、この獣を呑み込むという大蛇がいる。その蛇皮は堅くて叩き切れないが、頭上に孔があり、開いたり閉じたりして、時には光を発するのだが、この中を射れば、蛇は死ぬ。**

物産略與儋耳、朱崖同。地温暖、風俗不淫。男女皆露紵。富貴者以錦繡雜采為帽、似中國胡公頭。食飲用籩豆。其死、有棺無槨、封土作家。

物産はほぼ儋耳、朱崖と同じ。土地は温暖、風俗は淫ではない。**男女は皆、頭に何も被らない。富貴な者は錦に彩色の刺繡をして帽子とし、中国の胡族の頭装に似ている。**飲食には御膳を用いる。その死者の埋葬には棺はあるが槨はなく、土を封じて塚とする

空想の産物？

別の民族では？

人性皆嗜酒。俗不知正歳、多壽考、多至八九十、或至百歳。其俗女多男少、貴者至四五妻、賤者猶兩三妻。婦人無姪妒。無盜竊、少諍訟。若犯法、輕者沒其妻子、重則滅其宗族。

人の性は皆、酒を嗜む。俗は歴を知らず、長寿が多く、多くは八～九十歳、あるいは百歳になる。

その風俗では女が多く男が少ないので、貴者は四～五妻、賤者でも二～三人の妻がいる。婦人は嫉妬せず。盗難もなく、諍訟は少ない。もし法を犯せば、軽い罪なら妻子の没収、重い罪ならその宗族を滅ぼす。

一夫多妻の理由が具体的に記され、説得力があるが、独自に追記したものでは？

漢靈帝光和中、倭國亂、相攻伐歴年、乃共立一女子卑彌呼為王。彌呼無夫婿、挾鬼道、能惑衆、故國人立之 有男弟佐治國。自為王、少有見者、以婢千人自侍、唯使一男子出入傳教令。所處宮室、常有兵守衛。

漢の靈帝の光和中(178-184年)、倭国は乱れ、何年も戦さを続けたので、卑彌呼という一人の女性を共立して王とした。彌呼には夫婿はなく、鬼道を身につけ、よく衆を惑わすので、国人はこれを立てた。国政を補佐する弟がいる。王となってより会った者は少ない、千人の婢が側に侍り、ただ一人の男子に教令の伝達のため出入させている。暮らしている宮殿には常に兵がいて守衛している。

後漢書の「桓靈間」より年代が具体的に判り説得力があるが、独自意見では？

至魏景初三年、公孫淵誅後、卑彌呼始遣使朝貢、魏以為親魏王、假金印紫綬。

正始中、卑彌呼死、更立男王、國中不服、更相誅殺、復立卑彌呼宗女臺與為王。 其後復立男王、並受中國爵命。

魏の景初三年(239年)、公孫淵が誅殺された後、卑彌呼は初めて遣使を以て朝貢し、魏は親魏王と為し、仮の金印紫綬を授けた。

正始中(240-249年)、卑彌呼が死に、改めて男の王を立てたが、国中が服さず、互いに誅殺しあったので、再び卑彌呼の宗女「臺與」を王として立てた。

その後、また男の王が立った、いずれも中国の爵命を拝受した。

時間軸がそろい、理由も判り、明瞭な記述だが、独自意見では？

得意げな注釈

- \*\* 魏志倭人伝の中の「其使詣中國皆自稱大夫」の言葉と「黥面文身」と「夏后少康之子」の挿話から勝手に解釈して、「太伯の後裔」と言ったと言い換えたもの。
- 梁書倭伝は、著者の想像を交えた変更を加えた全く信頼性の無い『非一級歴史書』。引用不可。

倭國在百濟新羅東南、水陸三千里、於大海中、依山島而居。魏時譯通中國三十餘國、皆稱子。夷人不知里數、但計以日、其國境東西五月行、南北三月行、各至於海。其地勢東高西下、居於邪摩堆、則魏志所謂邪馬臺者也。

倭国は百濟・新羅の東南の水陸3千里の大海の中にある。魏の時代に往来する国が三十数ヶ国あった。倭人は野蛮人で距離を測る里数と云う単位を知らず、日数で計測する。国境は東西で五ヶ月、南北で三ヶ月で各々海に至る。地勢は東に高く、西に低い。ヤマイ即ち魏志の云う邪馬台である。(丸地訳、以降も同じ)

又云、去樂浪郡境及帶方郡、並一萬二千里、在會稽東、與儋耳相近。俗皆文身、自云太伯之後。計從帶方至倭國、循海水行、歷朝鮮國、乍南乍東、七千餘里、始度一海、又南千餘里度一海闊千餘里、名瀚海、至一支國。又度一海千餘里、名末盧國。又東南陸行五百里、至伊都國。又東南百里、至奴國。又東行百里、至不彌國。又南水行二十日、至投馬國。又南水行十日、陸行一月、至邪馬臺國。即倭王所都。

又、樂浪郡の境及び帶方郡から一万二千里と云い、會稽の東にあり、儋耳に近い。習俗としては、皆入墨があり、太伯の子孫と云う。帶方郡から倭国へ行くには、海をめぐり行き、朝鮮国を経て、南へ東へ沿岸を進み七千里。始めて大海を渡り、又南へ大海を千里渡る、名付けて瀚海と云い、壹岐国に至る。又、海を千里渡り末盧国と称す。東南へ陸行五百里で伊都国、東南に百里奴国に至る。東へ百里で不彌国に至る。又、南へ水行二十日投馬国に至る。又、南へ水行十日と陸行一月で邪馬台国に至る。即ち、倭王の都とする所。

漢光武時、遣使入朝、自稱大夫。安帝時又遣朝貢、謂之倭奴國。靈帝光和中、其國亂、遞相攻伐、歷年無王。有女子名卑彌呼、能以鬼道惑衆、國人共立爲王。無夫有二男子、給王飲食、通傳言語。其王有宮室樓觀城柵、皆持兵守衛。爲法甚嚴。

漢の光武の時、使節として入朝する者は大夫と自称した。安帝の時に又倭奴國と云う国名で朝貢が行われた。靈帝の光和年間に、その国は乱れ、相互に攻め、何年も王が居なかった。卑彌呼と云う女性が居て、鬼道によって民衆を惑わす。倭国の人々は、共に、この人を王とした。夫は無く、男子二人が王に食事をもち、言葉を伝えた。その王宮には物見やぐら、城柵があり、皆、武器をもち守衛する。法律を厳重に守る。

魏景初三年、公孫文懿誅後、卑彌呼、始遣使朝貢、魏主假金印紫綬。

魏の景初三年に公孫淵文懿が攻め殺された後に、卑彌呼は始めて、朝貢の遣使を送り、魏主は金印紫綬を授けた。

正始中、卑彌呼死、更立男王、國中不服、更相誅殺、復立卑彌呼宗女臺與爲王、

正始年間に、卑彌呼は死に、男王が立ったが國中が従わず、更にお互いに誅殺する。再び、卑彌呼の宗女の臺與を立て王とした。

- 北史倭国伝は、南北朝時代(439年 - 589年)の北朝にあたる王朝、北魏・西魏・東魏・北齊・北周・隋の歴史を記している。李大師とその子の李延寿が書き、659年完成か。(梁書の完成629年の後)
- 北史倭国伝は、魏志倭人伝、梁書、隨書を参照し、唐の時代に中国へ来た日本人からも情報を得て、記述したものと言われる。
- 「靈帝の光和年間に、その国は乱れ」は、梁書の「光和中」の表現を若干変更したもの。
- 景初3年の記述は、梁書の「至魏景初三年、公孫淵誅後、卑彌呼始遣使朝貢」の「淵」の部分の字の「文懿」を追加し、記述。梁書の引き写しと見える。
- 里数の記述、行程など、歴史書から解釈し、自己の判断を加えて記述したもので、更に、信頼性に欠ける。

## 梁書・北史などの信ぴょう性について

- 梁書の倭国伝（完成 629年）
  - 歴史・風土などの記述は、魏志倭人伝の引き写し。
  - その引き写しの中に、誤記や、想像による誇張や、後漢書からの引き写しが入る。新たな日本との往来による新情報も、有ったと見えない。
    - 梁書の倭国伝に関しては、信憑性は無い。
  - 景初3年の項も、あて推量で、「もっともらしい」理由をつけて、得意げに変更したと思われる。
  - 魏志の記述が、元々景初3年となっていたならば、この「もっともらしい」理由をつけることは却って不自然で、**魏志には2年であったことになる。**
- 北史の倭国伝（完成 659年）
  - 梁書の引き写しの部分が多く、梁書の信頼性の無さをそのまま受け継いでいる。
- 日本書紀の神功皇后の摂政紀三十九年条に「太歳己未。魏志云、明帝景初三年六月、倭女王遣大夫難斗米等、詣郡、求詣天子朝獻。」とある。
  - この項の景初3年記述は、**死んでいないはずの明帝の3年と記述するなど**、宛て推量で記述していること、**信頼性の無い梁書や北史などを参照した可能性もあり**、景初二年を覆す根拠にはならない。
- 梁書・北史などは、信頼性に欠け、景初二年を覆す根拠にはならない。同様に、日本書紀も、信頼性に欠け、これも、根拠にならない。

[https://www.ne.jp/asahi/issun/original/siryo\\_kanen.html](https://www.ne.jp/asahi/issun/original/siryo_kanen.html)

- 『翰苑』は誤字脱字が多く、また「〇〇曰」と書きながら、引用文が原本と異なっていたり、そのまま鵜呑みにはできない歴史書である。なお、出典は竹内理三『翰苑』(吉川弘文館)による。 2011.09.03

{ 翰苑 }

{ 魏志倭人伝 版本 }

魏志曰 倭人在帶方東南 炙問倭地 絶在海中 洲島之山  
或絶或連周旋可五千餘里 四面俱柢海 自營州東南 經新  
羅至其國也

倭人在帶方東南大海之中依山島爲國邑舊百餘國  
漢時有朝見者今使譯所通三十國從郡至倭循海岸

景初之辰 恭文錦之獻

魏志曰 景初三年 倭女王遣大夫難升米等 獻男生口四  
人 女生六人 班布二疋二尺 詔以爲新魏倭王 假金印紫綬  
正始四年 倭王復遣大夫伊聲耆 振邪 拘等八人 上獻生口也

景初二年六月倭女王遣大夫難升米等詣郡求詣天子朝獻太守劉夏遣吏將送詣京都其年十二月詔書報倭女王曰制詔親魏倭王卑彌呼帶方太守劉夏遣使送汝大夫難升米次使都市牛利奉汝所獻男生口四人女生口六人班布二匹二丈以到汝所在踰遠乃遣使貢獻是汝之

- ✓ 魏志では景初二年のことです。  
使者の難升米と都市牛利という名が混ぜられ、  
献じた斑布は二疋二丈(=百尺)となっています。  
以上 東亜古代史研究所 塚田敬章氏のコメント
- ✓ 倭国の項も、違いだらけで、「魏志曰」とは白々しい。少し似た文章で、構文も変更されている。次の魏志曰くの「魏」の字もまず、違う。「親魏倭王」の称号も「新」になっており、人名も似ているがちがいだらけ。

➤ ウキペディアの翰苑の記述:

- 660年以前に対句練習用の幼学書として書かれたとされている。
- ◆ 魏志曰くと書きながら、魏志の文字・内容と異なることを書き連ねた文章は、歴史史料として価値は無い。ウキペディアの「練習用幼学書」が適切な表現と思える。
- ◆ 翰苑を引き、景初3年とした説は、検討にも値しない。

- ・ フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』によると
- ・ 977年から983年(太平興国2-8年)頃に成立した。北宋の太宗(2代)時代、李昉、徐鉉ら14人による奉勅撰。
- ・ 原典からの引用とは限らず、先行する類書である北齊の『修文殿御覽』(佚書)や、唐代の『芸文類聚』、『文思博要』(佚書)からのいわゆる孫引きであることが多い。
- ・ 右を見て、すぐに判るように、章立てから、魏志倭人伝とは異なる。
- ・ 1行目だけを比較すると、すぐに5か所で魏志倭人伝の版本とは異なる部分が見つかる。
- ・ 倭国乱の時期を「漢靈帝光和中」と梁書の記述が挿入されている。
- ・ 景初3年とし、その年を「公孫淵死」と、梁書の「公孫淵誅後」と同意の文章を追加。
- ◆ 太平御覧は、その成り立ちからして、正確に原文を写したもので無く、意図をもって編集したもの。特に梁書を引いている処も多く、信ぴょう性は無い。
- ◆ 従って、太平御覧の「景初3年」は、魏志には元々3年とあったとする論拠にはならない。

宋槧本『太平御覧』 所引『魏志』倭人伝

第一条

魏志曰倭国在帶方東南大海中依山島為旧国百余小国漢時有朝見者今令使訳所通其三十国從帶方至倭循海岸

倭人在帶方東南大海之中依山島為國邑舊百餘國漢時有朝見者今使譯所通三十國從郡至倭循海岸

百多里地多山林無良田食海物自活乘船南北市糶又南渡一海一千里名曰瀚海至一大国置官与对馬同地方三百里多竹木叢林有三千許家亦有田地耕田不足食方行市糶又渡海千余里至末盧国戸四千浜山海居人善捕魚水無深淺皆能沉沒取之東南陸行五百里到伊都国官曰爾支副曰泄謨觚柄渠觚有千余戸世有王皆統属女王帶方使往來常止住又東南至奴国百里置官曰先馬觚副曰卑奴母離有二万余戸又東行百里至不弥国戸千余置官曰多模副曰卑奴母離又南水行二十日至於投馬国戸五万置官曰弥弥副曰弥弥利又南水行十日陸行一月至耶馬台国戸七万女王之所都其置官曰伊支馬次曰弥馬叔次曰弥馬獲支次曰奴佳鞮其属小国有二十一皆統之女王之南又有狗奴国男子為王其官曰狗石智卑狗者不属女王也自帶方至女国万二千余里其俗男子無大小皆黥面文身聞其旧語自謂太伯之後又云自古以来其使詣中国草伝辞說事或蹲或跪兩手據地謂之恭敬其呼応声曰噫噫如然諾矣

第二条

又曰倭国本以男子為王漢靈帝光和中倭国乱相攻伐無定乃立一女子為王名卑弥呼事鬼道能惑衆自謂年已長大無夫婿有男弟佐治国以婢千人自侍唯有男子一人給飲食伝辞出入其居處宮室樓觀城柵守衛嚴峻景初三年公孫淵死倭女王遣大夫難升米等言帶方郡求詣天子朝見太守劉夏送詣京師難升米致所献男生口四人女生口六人班布二疋詔書賜以雜錦采七種五尺刀二口銅鏡百枚真珠鈿丹之属付使還又封下倭王印綬女王死大作冢殉葬者百余人更立男王国中不伏更相殺數千人於是復更立卑弥呼宗女台拳年十三為王国中遂定其倭国之東渡海千里復有国皆倭種也又有朱中儒国在其南人長三四尺去倭国四千余里又有罽国墨齒国復在其南船行可一年至

## 誤記・転写ミスは：有るのか、無いのか？

- 邪馬台・壺で、転写ミスがあったことが、明確になった。
- しかし、その外にも誤記・転写ミスがあると、云えるのか？
  - 云う場合には、根拠をしっかり出して欲しい。
    - **古文書を、転写ミス・誤記、誤判断、知識不足などと、勝手に言い放つ(書き放つ)人がいるが、不遜な行為。** 間違いとするならば、誰もが納得する明確な根拠を示すことが必要。
    - 特に、邪馬台国論では、都合が悪いことは、「間違い」としてきた百年以上の経歴があるが、歴史研究の本質に戻り、理由なく「間違い」と記すのは止めるべき。

だから、邪馬台国論争は終わらないのだ！



- 写本は、ミスが多いのか？
  - 写本には、2種類ある。
    - **公式文書を専門職が行うもの → 専門職のプライドがあり、ミスは極めて少ない**
    - **個人の必要に応じて行うもの → 関心や必要性の少ない部分にはミスが多い。**
      - このレベルの写本を引き合いに、「写本にはミスは付きもの」というのは、素人。
  - 台と壺：固有名詞で、一カ所だけと云う「ミスが確認できない」最悪な状態で発生。
  - 二年と三年：専門職が行う写本では、あり得ない。
  - 南と東：ミスでは有りえない。
  - 壺与と台与：固有名詞だが、3カ所あり、間違いが発生する可能性は稀。壺与が正しい。

# 魏志倭人伝：理解の誤り ①

- 寺沢薫氏の「景初2年・3年の問題」
  - 現存する『三国志』の諸版本はすべて、使節が帯方郡に来たのは景初二年(238)六月のこととする。にも拘らず、二年六月は三年六月の誤りだとして、テキストを改める考えがほぼ定説となっている。とする。
    - その理由として、[梁書・翰苑・日本書紀の神功皇后の条](#)をあげる。
      - さらに、[版本の誤写の可能性を示し、誤写や誤刻などは当然起こりえたと考えるのである。](#)
    - 更に三年説に基づき、魏の王朝での、倭朝貢の行事の描写を行い、三年説が無理のないことを示す。
  - 景初2年説をとる金文京(きんぶんきょう)氏・仁藤敦史(にとうあつし)を紹介し、2年説を記述した上で、正始元年までの空白の1年間を腑に落ちないとして、否定
  - 最終的に景初3年説に分があると思う。と結論を述べている。
    - ✓ その理由として挙げた[梁書・翰苑・日本書紀の神功皇后の条](#)に信憑性は無い。
- 文献の解釈を寺沢氏が行うならば、考古学が正確さを確保するために行った注意深さと緻密な検証を、文献に対しても行うべきだと思う。
  - 魏志倭人伝の信頼性は、多くの論者が述べている。
    - 三国志以前の中国史書では、伝聞に基づき、想像を交えて日本・倭国について記している。
    - 魏志倭人伝では、初めて、魏の正式な使者が、2回も訪問し、その報告書に基づいて記述されたものとして、評価が高い。
    - (旅程を検討し、邪馬台国の位置が不明なのは、文書の信憑性とは、別の問題。)
      - (旅程を解釈する前提に問題があると考える。)(別途、論を講じるが今は、これ以上記さない。)
  - その数百年後に記載された[梁書・翰苑・日本書紀の神功皇后の条](#)に信憑性が無いことは明らか。
    - 不正確な史料と判明した場合は、採用しないのが原則。
      - 採用する場合は、採用部分の信憑性を、別途、証明する必要がある。
      - 寺沢氏は、該当部分の信憑性の証明をしていない。
  - [考古学者で有っても、文献を使って、歴史文書を書く時は、「史料批判」を忘れてはならない。](#)

# 魏志倭人伝：理解の誤り ②

## 『誤解のなかの大国—当時の地理観』

いずれにしても、中国王朝との交渉の門戸であった楽浪・帯方郡を魏が掌握したことは、卑弥呼 政権による最初の遣使の直接的な動機であった。公孫氏を滅ぼした魏王朝の冊封体制下に入ることは、新生倭国がとりうる唯一の生き残り策だったからである。

一方、魏王朝側にも倭国を取り込みたい事情があった。それは倭国の地理的位置に対する当時の認識にもとづいている。

『魏志』倭人伝は、計其道里、当在会稽東治之東。其の道を計るに、当に会稽の東治の東に在るべしと記載し、--中略--

会稽郡東治県は現在の福建省福州市にあたる。倭地（日本列島）は、ほぼその東方海上にあると考えられていたことになる。

また写真2は、李氏朝鮮の1402年に作成された『混一疆理歴代国都之図』である。

- その中で 倭地が北部九州から南へと長く伸びた島国として描かれている。(邪馬台国畿内説には有利：南→東と間違えている)
  - 朝鮮半島は巨大に描かれ、中国に近い。
  - 日本は、中国からも朝鮮からも離れ、領土面積は朝鮮半島の数分の一しか無い。
    - 李氏朝鮮の意図が丸見えの作図と判るもの。(史料価値が無い)
- この地図を所有する龍谷大学の紹介文では、『李氏朝鮮の廷臣である権近が、西を上方にして描かれた日本を具体的に書き表した最古の地図「行基図」を、不用意に挿入してしまったためだそうだ。』とある  
[https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/60/11\\_treasure/treasure.htm](https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/60/11_treasure/treasure.htm)
- 寺沢氏の示す地図と解釈は、邪馬台国畿内説の論者が良く説明するもの。
  - 後世の人が誤った地図と方向を持った証拠を見つけ、これを魏志倭人伝の解釈にあてたもの。こんな意図的な誤った図の通りに、中国人が理解したとは思えない。
- 寺沢氏の「魏志倭人伝の評価」自体に問題がある。
  - 魏志倭人伝が、魏の国の使者が、直接航海して、倭国へ行き、その報告書をベースに、書かれた実地・実務ベースのものであることを忘れた解釈。
    - 二組の使者が、実際に渡航したことから、報告書に誤りが有れば、次の使者が正すことになる。
    - 航海する海軍・海人が、東西南北を理解できない筈がない。
- 魏の使節団が現地まで航海し、確認した場所を、千年以上後史料で、しかも、現地に行ったことの無い文化人の記したことで、否定することは、歴史学では許されない。



写真2 『混一疆理歴代国都之図』(部分) (龍谷大学図書館所蔵)

『魏志倭人伝』は「卑弥呼の墓」を径百余歩とする。

- 径百余歩の解釈：
  - 長里説： 径とは差し渡しのこと。一步は1.44mとされる。百余歩だから144mよりやや大きいくらい。
  - 短里説： 1歩は1里の300分の1ですから短里だと25cm、100余歩は30m程になります。
- 魏の明帝が年号を景初に改めた時に、暦と度量衡の変更を行った。その結果、短里が採用された。  
(半沢栄一著「邪馬台国の数学と歴史学」に詳しい。)
  - 短期間だけ、短里が使用された。(それ以外に時期には、魏では、長里が使われた。)
  - 魏志倭人伝では、朝鮮半島から対馬・壱岐の間を千里としており、実際の距離は約70km。
    - 単里では、千里は 77km
    - 長里では、千里は 434km
  - 従って、魏志倭人伝では、短里を使っていたことが明白。
- 寺沢薫氏は、「卑弥呼とヤマト王権」では、何も論ぜず、長里に基づき、144mを使っている。
  - 旅程・方位を無視し、検討しない邪馬台国畿内論者は、倭人伝で短里が採用されていたことを無視し、自説が有利となる長里で計算する。
- 寺沢氏は、魏志倭人伝の基本的な解釈の方法を間違っている、又は、意図的に、正確な解釈をしない。
  - 『たかだか2000文字に満たない漢文』だからこそ、正しく解釈しようとする姿勢が必要。

## 『狗奴国はどこか』

- 寺沢氏の句奴国論は不明瞭。
  - 候補地として：熊本の菊池川流域をあげるが、畿内ヤマト説から否定
    - 紀伊半島の熊野/関東平野北部の毛野(けぬ)/遠江東部+駿河西部を候補地と挙げる
      - この3ヶ所は、有力な候補地だが、やや物足りないとして排除
    - 伊勢湾沿岸や濃尾平野一帯が有力視されるとして、狗奴国濃尾平野説と紹介。
      - 有力な理由に、赤彩が特徴的な土器(山中様式)、三遠式銅鐸、S字甕/パレス式壺など、前方後方墳をあげる。
      - 狗奴国濃尾平野説を主張する赤塚次郎氏の説の「狗奴国連合」は否定する。「連合」にはなり得ないと。
- 「狗奴国」：寺沢氏の解釈
  - 正確を期して念を押せば、
    - 狗奴国王と卑弥呼が「不和」(素より和せず)として、国と国が不仲だったわけではない。
    - 政治関係にさかのぼって考えるのは行き過ぎである。
    - 狗奴国は卑弥呼共立に同調せずヤマト王権への参画を拒んだ、邪馬台国の南(東)方に位置する国
      - 戦争など発生する余地は無かったように記している。
- 魏志倭人伝の記述
  - 正始8年：倭女王卑弥呼は狗奴国男王、卑弥弓呼素と和せず、倭載斯烏越等を遣はし、郡に詣り、相攻撃する状を説く。
    - 邪馬台国と狗奴国は、戦争状態であることを、『相攻撃する状を説く。』と切迫した状況を伝え、救援を求めた結果魏は次の行動をとった。
      - 張政等を派遣し、詔書、黄幢を難升米に授け、檄文をつくり、告げた。
- 寺沢氏の解釈は、『相攻撃する状を説く。』という切羽詰まった戦争状態を無視した解釈。
  - 魏志倭人伝に書かれたことを正確に理解しようとせず、自説に有利な勝手な解釈をしており、論外。
- 狗奴国濃尾平野説は、有り得ない。(濃尾平野は三遠式銅鐸の地)
  - 近畿式銅鐸と三遠式銅鐸は同じように埋納目的で製作され、埋納されたと寺沢氏は記す。
  - 畿内と濃尾平野は、卑弥呼擁立の直前・最後の埋納を協調して行った地域であり、「素より不和」・「相攻撃する状」と言う倭人伝の記述からは、程遠い。
  - 畿内と濃尾平野の間で、戦争が起きていた痕跡/遺跡は無い。
  - 勿論、方位も違う。

- 『戦後の古代史研究の成果によれば、もはや『記紀』の内容をそのまま経時的な歴史史料として対象化する研究者はほぼいないだろう。』と、津田庄吉の歴史観を取り入れ、神話の時代を否定し、一切記紀神話を排除してきた戦後歴史学の動向を肯定した。
- 津田左右吉氏は、優秀な歴史学者であることは認めるが、全能では無かった。
  - 津田氏は、神武東征軍が来た「青雲の白肩津」や「楯津」が、現在の大阪平野では、海から遠く離れた地域にあり、船で来られた可能性は無いと、神武東征を否定した。
  - しかし、大阪平野をボーリングして得られた結果から再現した古地図では、古代では、大阪湾は深く内陸に入り込んでおり、生駒山地の麓に達するほどだった。
  - 「青雲の白肩津」や「楯津」は大阪湾＝海にあり、上陸に最適な土地であった。
  - 津田左右吉の否定した神武東征は、現実に存在したことが実証された。
- 過去の贖罪のために古代の歴史研究を止めてしまった戦後歴史学は、上記にも拘らず、戦後75年を過ぎても、一切、記紀神話を検証しようとしめない。こんな真実から遠く離れてしまった戦後歴史学を、寺沢薫氏は擁護する。
- 戦後考古学の発掘成果は大きく、神武東征に関わる地域からは戦傷死人骨(遺跡)・高地性集落が発見され、出雲国譲りの建御名方神に関わる日本海沿岸から長野にかけて、同様に高地性集落と戦傷死人骨・青銅製武器・銅鐸の埋納が出土した。
  - 記紀神話を考古学が検証すべき時代に入っている。
- 勿論、記紀神話は、歴史学として時間軸を整理した読み方をしてみるべきで、従来の時空を超えた解釈からは、離脱すべきだと考える。
  - 試みに、記紀神話を登場人物から時間軸を整理すると、歴史として検証に値する読み方ができる。
- 寺沢薫氏が、記紀神話から天孫族・出雲族の対立関係を把握していれば、ナ・イト国(イト倭国)とイズモ・タニハ/キビ(瀬戸内)/近畿」連合の対立を的確に把握できた筈と残念に思う。
  - 寺沢氏ならば、出雲勢力の動向を考古史料から適格に把握して表現してくれた筈で、古代史の研究が一気に進んだ筈と、重ねて残念に思う。

## まとめ

- 尊敬する寺沢薫氏が「邪馬台国」・「卑弥呼」について書き下ろしたことを知り、期待して「卑弥呼とヤマト王権」を読んだ。
- 読みごたえのある分厚い書物であったが、寺沢薫氏が、従来の著書では、個人的には、明確に理解できなかった観点が判り、歴史観が明らかになった。
- 戦傷死人骨(遺跡)と埋納に関する基本的な解釈に間違いがあり、さらに、弥生時代に戦争を起こした対立グループの地域的解釈の間違いも重なり、奇妙な歴史観が出来上がっていた。
  - 勿論、個々の内容は考古学に裏打ちされ、現実味のあるものではあるが、全体としては矛盾に満ちたものだった。
  - 上記の戦傷遺跡・埋納・対立グループの解釈違いは致命的。
    - 北九州の勢力が東側のイズモ勢力とが戦い、イズモ勢力の圧倒的優位の中で、ヤマトに、卑弥呼の共立王権が成立したとする。これは誤り。
  - 「戦傷死人骨(遺跡)は勝者のもの」とし、「敗者の祭器を地下に埋めた」と解釈すると、逆の歴史観となる。
    - 遺物だけからの歴史観は、奇妙なもので、記紀や、神社や伝承とは全く異なるものになった。
- 文献史料である魏志倭人伝や中国史書を軽視し、邪馬台国を論ずるために、止むを得ず、部分的に読んで解釈しているが、歴史学者としては史料批判を行わないため、鋭い洞察は示すが、矛盾だらけの解釈となった。
  - 大和・畿内に邪馬台国を持って来るために、倭人伝の旅程・方向論を排除した悪影響が、倭人伝解釈にも出てしまった。傾聴に値する解釈は無かった。
- 寺沢氏が、日本の文献・記紀神話を完全に無視したため、無味乾燥の歴史が記された。
  - 記紀神話・神社・伝承など日本人の心に響く記述が全くなく、しかも、注目される卑弥呼や邪馬台国も誤ってしまった。
- 尊敬する考古学者の著した「卑弥呼とヤマト王権」であったが、文献などを軽視・無視した結果、ひどい歴史となり、誠に残念であった。